

23.3.13 東電社長が謝罪

東京電力の清水正孝社長は13日夜、記者会見し、
「放射性物質の漏えいにより、広く社会に大変なご心配とご迷惑をお掛けし、心よりおわび申し上げます」と謝罪した。また、
「福島第一原発については、（放出された）放射性物質の量は敷地境界で現在毎時80マイクロシーベルトなので、ただちに人体に影響が出るレベルではない」と、周辺住民への健康被害を否定した。



清水正孝社長

23.3.13 首相「東電の報告遅れた」

福島原発爆発

菅直人首相は13日午後、首相官邸で社民党の福島瑞穂党首と会談し、福島第一原発1号機の12日の爆発の説明が遅れた理由について
「東京電力の報告が遅れた」と述べた。同党の重野安正幹事長が記者団に明らかにした。



菅直人首相



福島瑞穂党首



重野安正幹事長

23.3.13 「チェルノブイリと違う」

韓国大統領に首相

菅直人首相は13日、韓国の李明博大統領と電話で会談した。首相は福島原発での爆発について
「放射能が大気中にわずかに流出しているが、大量流出したとの報告はない。（1986年の）チェルノブイリ原発の事故とは根本的に違う。被害が拡大しないよう対応していく」と説明し、理解を求めた。
大統領は
「日本政府はきちんと統制された対応をしており、心配していない」と強調。



菅直人首相



李明博大統領

23.3.13 独、原発総点検へ

ドイツのメルケル首相は12日夜、福島原発の事故を受け、ドイツ国内の全原発の安全性を再確認する方針を示した。同国は昨年、脱原発政策を修正し、2022年までとしていた原発の稼働期間を平均で12年延長することを決めたばかり。
野党などは延命撤回を求める声を強めており、日本での危機が今後の議論に影響を及ぼすのは必至だ。ドイツ通信などによると、メルケル首相は



メルケル首相

「日本での事態は、世界にとって決定的」と述べ、原発全17基の安全性を点検する方針を表明。レトゲン環境相も今後のエネルギー政策について、議論する必要性を示唆した。
野党の社会民主党（SPD）や緑の党の幹部は相次いで延命見直しを求める意見を表明。

23.3.13

古里いつ帰れる

原発地域避難拡大 脱出、身寄せ安堵

物資、情報乏しく

東日本大震災で家やライフラインを失った被災者の避難所生活は13日で3日目を迎え、不便な暮らしに疲労といら立ちが漂い始めた。

東京電力福島第一原子力発電所1号機の事故で避難指示が出された人々は慣れない場所での生活に古里への思いを募らせる。食料や毛布などの物資が十分に確保できない避難所もあり、関係者は対応に追われている。

川俣町の川俣南小の避難所は13日、日赤職員が避難指示区域から脱出してきた、お年寄りの健康状態を確認していた。被災の疲れからぐったりと体を横たえる姿も多い。

「一体いつになったら帰れるのだろうか」

13日朝、この避難所に到着した浪江町樋渡の無職若月亘さん（87）は、これから始まる暮らしを思い、暗い気持ちになった。避難指示が出た12日、パトカーがサイレンを鳴らし自宅前に止まった。現れた防護服にマスクの警察官の姿が脳裏から離れない。

「避難指示が出た。今すぐ逃げて」。

見たこともない重装備の警察官の切迫した声を聞き、深刻さを感じた。着の身着のまま妻と姉を車に乗せた。渋滞のため、3時間で10^{キロ}ほどしか進まない。迫る危険に追い立てられるように車を走らせた。カーラジオが原発トラブルのニュースを次々と報じる。川俣町に入った頃には夜中になり、疲れ切って道の駅で車中で朝を迎えた。

「命が助かっただけでも、よしとしなければ」。

自分を納得させるようにつぶやいた。同じ避難所で2日目を迎えた浪江町大堀の農業渡部秀綱さん（70）はタバコやコメ、野菜を育てる自分の田畑を気に掛けた。

4月は苗植えや種まきの重要な時期。約50^{ヘクタール}離れた地にも、風向きが気になるという。畑に南風が吹くと、原発から放射性物質が飛んでくるような重いが頭をもたげる。

「原発は心配ないと言われてきた。信じていたのに・・・」



川俣町の川俣南小体育館で日赤職員の健康チェックを受けるお年寄り＝13日午前10時20分ごろ

パンと飲料水に列

避難指示が出された大熊町、浪江町など原発立地町の住民約1500人を受け入れた田村市総合体育館。13日正午ごろ、パンと飲料水が配られると被災者が長い列をつくった。

「余震が続いていて夜も眠れない。足が不自由な両親がおり、移動に苦労している。車椅子が欲しい」。

大熊町の無職梅田ひとみさん（54）は訴えた。

東電福島第二原発に勤務する大熊町の青木政勝さん（48）は

「地震の時、事務所にいた。すぐに避難指示が出て、夢中で乗用車で逃げた。仲間とも連絡が取れない・・・」

と不安な思いを口にした。大熊町は町のほぼ全てに避難指示が出ているため、同町は体育館に町対策本部を設けた。泉田隆一同町出納室長（60）は



田村市総合体育館で配給されるパンと飲料水を求め、長い列をつくる被災者＝13日午前11時55分ごろ

「早朝から夜中まで、（田村市には）本当に世話になっている」と感謝した。田村市職員は不眠不休で被災者のケアに当たっている。体育館職員の佐藤輝男さん（49）は

「丸2日間自宅に帰っていないが、避難してきた人のために頑張るしかない」と語り、被災者の困り事相談を聞いて回った。市社会福祉協議会の職員らが館内を巡回し、健康チェックなどを行った。田村市は総合体育館など市内19カ所に避難所を設け、12日から約8千5百人を受け入れている。

23.3.13 富岡と大熊から150人受け入れ 本宮高

本宮市の本宮高は、12日から富岡町と大熊町の約150人を受け入れている。市災害対策本部などが食料を提供している。

富岡町小良ヶ浜の無職前田幸袴（こうい）さん（78）は

「薬も数日分しかない。ペットの犬も置いてきた。原発の安全性を信じていたのに」とぐったりした表情で語った。

避難者には大熊町の認知症対応型老人施設「クレール双葉」の入所者27人、職員10人もおり、毛布にくるまり、不満そうな表情を見せていた。

23.3.13 体育館での生活「体力的に不安」

原町の大橋さん

避難指示区域の南相馬市原町区に住む無職大橋良弘さん（74）は13日、身支度をせず家族6人で避難した福島市の三河台小で沈痛な表情を浮かべた。10年前に脳梗塞を患い、現在も毎日10種類以上服薬している。後遺症で左半身がまひしており

「体育館での生活は体力的に不安。この生活が続くと考えただけで気持ちが暗くなる」と話した。

23.3.13 双葉署と浪江分庁舎署員退去

駐在所で業務

県警は避難指示区域に当たる双葉署と同署浪江分庁舎の署員を13日午後1時まで退去させた。双葉署員は川内村の川内駐在所、分庁舎の署員は浪江町の津島駐在所で業務に当たる。連絡先は次の通り。緊急時は110番へ。

▽川内駐在所＝電話0240（22）2140▽津島駐在所＝電話0240（36）2017

23.3.13 ツイッターに不安やいら立ち

原発周辺住民

東京電力福島第一原発の爆発事故で、原発から半径20*。圏内に残っていたり、既に避難したりした住民がインターネットの短文投稿サイト「ツイッター」で不安やいら立ちの声ををつづっている。

南相馬市の女性は12日夜に

「放射能漏れの被害も私のところはモロ」と投稿し、13日朝になって

「車がない私は避難する方法がない」と再び書き込み。半日たっても避難できないことにいら立ちを見せた。

第一原発がある大熊町の住民の投稿の中には

「大好きな大熊に帰りたい」
と家を離れる悔しさをにじませるものも。
自衛隊車両で無事に避難した大熊町の女性は
「早く大熊に帰れますように」
と祈るようにつぶやいている。
避難の困難さを訴える投稿も多い。南相馬市から山形県に避難した女性は
「（福島県内に）もうガソリンはない」
と、途中で立ち寄ったガソリンスタンド店員の話を紹介。ツイッターを見ている人に向けて
「福島にガソリンを！」
と呼び掛けた。

23.3.13 JFAアカデミー生徒ら東京へ避難

日本サッカー協会の田嶋幸三副会長は13日、中高一貫でエリート選手を育成する「JFAアカデミー福島」の生徒76人と保護者、スタッフらが避難先のいわき市内からバスで東京へ向かったことを明らかにした。

北区の味の素ナショナルトレーニングセンターで健康診断を受ける予定。



JFAアカデミー福島

23.3.13 避難住民被ばく検査 郡山

青白い防護服の検査員の前に列ができていた。郡山市の郡山総合体育館は13日、原発立地町から避難してきた住民が不安そうな表情を浮かべ、被ばく線量の検査を受けた。被ばくしたことが分かり、避難所の県農業総合センターに移った双葉町の男性（55）は

「原発立地町に住んでいたので、ある程度は覚悟していた。津波で自分の家もめちゃくちゃ…。今後の生活がどうなるのか全く分からない」

と途方に暮れた。

大熊町の男性（63）は12日正午に避難を始め、約6時間かけてバスで田村市にたどり着いたが、2カ所の避難所で満員のため断られた。ようやく避難できる場所が決まり、郡山総合体育館で

「被ばくはしていなかったようだが、疲れはピークに達している」

とやつれた表情を見せた。

郡山北工高で体を休める住民は一様に疲れた表情を見せた。富岡町から家族ら5人で避難した会社員佐藤幹男さん（51）は

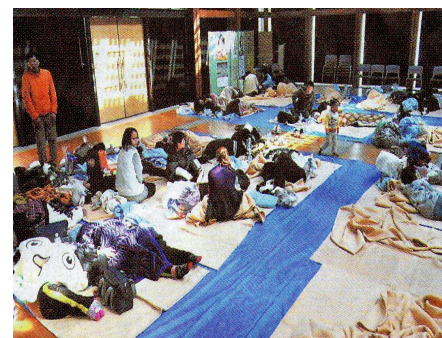
「最新の情報が知りたい」

と、もどかしさを募らせる。1台だけ備え付けられたテレビで、何度も繰り返される津波や福島第一原発爆発の映像から目を離さなかった。

親戚の行方が分からないまま避難した富岡町のアルバイト店員佐藤幸子さん（63）は

「一刻も早く家に帰りたい」

とうつぶわいた。



郡山市の県農業総合センターに着いて疲弊した様子で休む被災者ら＝13日正午ごろ

23.3.13 「被ばくの危険」郡山へ出動拒否 抗議受け給水車派遣 日本水道協

日本水道協会は13日、郡山市に給水車を数台派遣することを決めた。同市から地震直後に給水車の派遣要請を受け、

「被ばくの危険がある」
として出動を見合わせていた。同協会県支部長の原正夫市長の強い要請で同日、派遣が決まった。

市水道局によると、11日の市の要請を受け、10台を派遣する予定だった。そのうち2台は既に本県に向かっていて、しかし12日、

「放射線の危険がある」
として取りやめたいとの連絡があったため、原市長は
「自衛隊や消防など多くの方に支援してもらっている。（避難指示区域外に）派遣できないのはおかしい」
と強く抗議した。

23.3.14
午前11時1分

原発3号機も爆発

2号機、2度空だき

東日本大震災 福島第一 炉心溶融か

14日午前11時1分ごろ、大熊町の東京電力福島第一原子力発電所3号機が水素爆発した。

東電によると、自衛隊員を含む11人が負傷した。

原子炉圧力容器や原子炉格納容器は健全だという。

経済産業省原子力安全・保安院は、同原発から半径20^{キロ}以内の住民約650人に屋内退避を要請した。

東電は同日、同原発2号機が一時「空だき」になったことを明らかにした。

冷却用海水注入のポンプの燃料が切れ、原子炉水位が大幅に低下したためとしている。

同原発は12日に1号機でも水素爆発が起き、原子炉建屋上部が吹き飛んだ。

東電によると、福島第一原発2号機で14日夜、原子炉の水位が急速に低下し、一時燃料が水面から完全に露出、核分裂反応は収まっ



爆発し黒煙を上げる福島第一原発3号機＝14日午前11時過ぎ（福島中央テレビから）

ているものの空だき状態になった。周辺の放射線量のレベルが上がっており、東電は、燃料が溶ける「炉心溶融」が一部で起きたとみている。

海水を注入し、水位はその後上昇。午後9時34分には約4メートルある燃料の約半分が水に漬かる状態に回復した。全露出は約2時間半続いたとみられる。

枝野幸男官房長官は記者会見で

「原子炉の冷却作業は再開できており、
安定的な状況に向かっていくと思われる」

と述べた。

東電は原子炉格納容器の圧力を下げるため、蒸気を外部へ放出する作業を始めた。

しかし同日午後11時ごろ蒸気の放出ができなくなり、再び水位が低下、燃料棒が全露出した。

東電によると、15日午前零時すぎ、福島第一原発2号機で原子炉格納容器の非常用弁を開け、格納容器の圧力を下げる対策を取った。

2号機は原子炉に残った熱を冷やす機能が喪失し、東電は14日午後、原子力災害対策特別措置法に基づき国に「緊急事態」を通報。正午には水位が燃料から約3.4メートル上にあつたが、炉心に水を注ぐ装置が停止したとみられ、水位が急速に低下。この日午前中に起きた第一原発3号機の水素爆発の衝撃で故障した可能性がある。

午後4時34分に、2号機の原子炉への海水の注入作業を始めたが、実際に注入が確認できたのは午後8時ごろ。水位低下は続き、一時燃料すべてが露出した。作業員が見回りに出ている間に海水を注入するポンプの燃料が切れたのが原因だという。

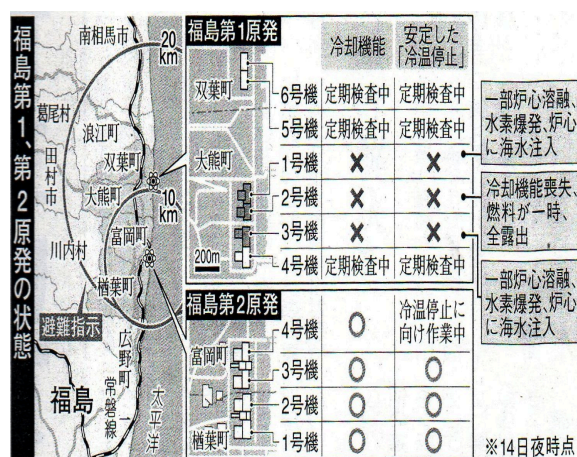
3号機では14日午前11時過ぎ、原子炉で発生した水素が原因とみられる爆発が起き、原子炉建屋上部が損壊した。東電によると11人が負傷、原子炉圧力容器や原子炉格納容器は健全と確認したとしている。

枝野官房長官は

「放射性物質が大量に飛び散っている可能性は低い」

と述べた。

負傷したのは東電社員4人、協力会社3人、自衛隊員4人で打撲などのけが。このうち7人が被ばくした。



23.3.14 危険レベルでない

官房長官

枝野幸男官房長官は14日夜の記者会見で、福島第一原発の事故に関し、
「炉心溶融を起こしている可能性は高いとの状況は（1～3号機）3つとも一緒だ」

と述べた。ただ、同原発周辺の放射線量に関しては

「しっかりモニタリングを続けており、人体に影響を及ぼす可能性はない」として、現状では危険なレベルには達していないとの認識を示した。



枝野幸男官房長官

23.3.14 国、事業者は収拾に全力を 佐藤知事

東京電力福島第一原発で爆発事故やトラブルが相次いでいることについて、佐藤雄平知事は14日夜の県災害対策本部会議で、

「国、事業者は事態の収拾に全力で取り組むよう強く要望する」と述べた。さらに、県民に対し

「国、事業者は事態の収拾に全力で取り組むよう強く要望する」重大な事態から一刻も早く立ち直り、県民の安全、安心を確保するよう全力で取り組む」

とのメッセージを送った。



佐藤雄平知事

23.3.14

メルトダウンの恐れ

福島第一原発2号機

放射性物質大量放出も

住民への影響懸念

冷却機能が喪失し、炉心の燃料が水面から完全に露出した福島第一原発2号機は、炉心溶融が進んで核燃料の大半が溶ける「メルトダウン」が懸念される状況になってきた。

1, 3号機で起きた水素爆発では鋼鉄製の原子炉格納容器は守られており、漏れ出る放射性物質は限定的だが、メルトダウンが進行すれば水蒸気爆発で容器ごと吹き飛び、大量の放射性物質がまき散らされる恐れがある。

史上最悪と呼ばれた1986年の旧ソ連のチェルノブイリ原発事故のように、放射能が住民の健康に長く深刻な影響を及ぼしかねない。

メルトダウンは1, 3号機で起きたとみられる。燃料の一部溶融がさらに進んだ状態だ。

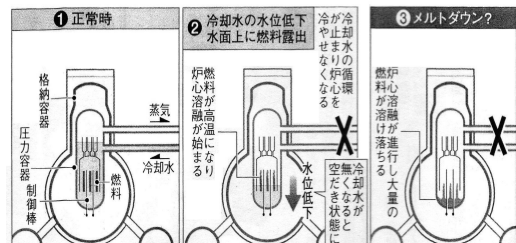
核燃料の集合体である炉心を冷やす冷却水の水位が下がって燃料が露出した状態が続くと、核分裂連鎖反応が終わっていても、生成された放射性物質が発する熱エネルギーのために高温になりすぎて燃料が溶け続ける。79年3月に米スリーマイルアイランド原発で起きた事故では、燃料を構成する物質の45%に当たる62トンの燃料が溶け、このうち20トンは炉心を囲む圧力容器の底に落ちた。

結果的に圧力容器は壊れず大量の放射性物質の漏れは避けられたため、住民の健康への影響は少なかったとされる。

ただ、小出裕章・京都大原子炉実験所助教が

「メルトダウンが起きるほど高温になれば、容器の底に穴が開いたり、容器内の水に高温の燃料が落ちて（水蒸気が一気に発生する）水蒸気爆発が起きて容器類を破壊したりする恐れがある」

と指摘する。



小出裕章助教

23.3.14

1, 2, 3号機 廃炉か

復旧 極めて困難 海水注入で腐食進む

原子炉圧力容器内の温度を下げるため海水が注入され、水素爆発を起こした東京電力の福島第一原発1号機と3号機、新たに海水の入った2号機の3つのプラントの復旧は極めて困難な状況となり、廃炉も含め検討されるもようだ。

14日、同3社が明らかにした。

政府関係者も同様の情報を把握している。

炉心に海水を注入すると、塩分で燃料棒を含めた内部の腐食が進む。

同社関係者は一度、海水の入ったプラントで再び発電できる可能性について

「復旧するにしても膨大な時間を要する」

と語り、毎炉の可能性を示唆した。

一方、微量の放射能を含む水蒸気放出が検討されていた福島第二原発1・2・4の各号機では圧力容器内の急激な圧力上昇は見られず、放出は行われていない。

東電によると、同原発1・2号機で、炉内の温度が100度以下になる「冷温停止」状態になった。危険な状態は脱したという。



14日に爆発した福島第一原発3号機(画面右)と12日の同原発1号機＝14日午前11時過ぎ(福島中央テレビから)

23.3.14

県内3火発、運転停止

原町はタンク付近で火災

南相馬市の東北電力原町火力、新地町の相馬共同火力発電新地、いわき市の常磐共同火力勿来の3発電所は地震と津波の被害を受け、運転を停止している。

原町火力発電所は、石炭の積み下ろしをする揚炭機4台が倒壊する被害を受けた。

14日には倒壊した重油タンク付近で火災が発生した。

従業員ら関係者約1000人が取り残された相馬共同火力発電新地発電所は、14日までに全員が無事救助された。

同社によると、津波の発生を受け、同社や協力会社の従業員、PR施設わくわくランドの来館者らが発電所3階のタービンフロアに避難

した。5メートルほどある発電所2階まで津波が迫ったという。水が引いた12日に自衛隊などのバスで全員が避難所や自宅に戻った。

常磐共同火力勿来発電所は地震により7・9号機が運転を停止した。被害状況を確認している。



燃え上がる原町火力発電所＝14日午後2時45分ごろ(NHKニュースから)

23.3.14 東電副社長が陳謝

東京電力福島第一原発2号機の燃料が水面から一時的に全露出して空だき状態になったことを受け、東電の武藤栄副社長は14日夜、都内で記者会見を開き、

「地震以降、福島第一原発については大変ご心配をお掛けしています。申し訳ございません」と述べ頭を下げた。

東電は14日夕から炉心に海水を注入し始めたと発表していたが、実際にはポンプが燃料切れで動いておらず、注入を確認できたのは午後8時ごろだった。

武藤副社長は「最悪の事態を避けるため、現時点では水を入れるしか対処方法がない」と声を震わせながら説明した。



記者会見で頭を下げる東京電力の武藤栄副社長（右）＝14日午後8時40分、東京都千代田区の同電力本社

23.3.14 3号機爆発 新たに7人被ばく

東電社員、自衛隊員ら

福島第一原発3号機の水素爆発事故で、東京電力は14日、作業をしていたけがをした社員や協力会社の作業員ら6人が被ばくしたと発表した。5人はすでに除染、残る男性社員（23）は意識があり、放射線量も高くないが、内部被ばくの可能性もあるという。

文部科学省も同日、社員らと作業中にけがをした男性自衛隊員1人が被ばくしたと発表。自衛隊員も内部被ばくの可能性があるため、放射線医学総合研究所に搬送された。

社員らと自衛隊員は冷却機能が下がった3号機の炉心に海水を供給する作業をしていた。

一方、総務省消防庁は同日、福島第一原発から放出された放射性物質で13日までに被ばくが判明した、病院からの避難患者ら3人から除染後も汚染の高い数値が検出され、2次被ばく医療機関に搬送されたと発表した。郡山市では14日、相双地区から避難してきた人が3554人となり、スクリーニングの結果、119人が除染対象となった。

県は各地でスクリーニングを行っているが、被ばく者数を把握できていない。

原発事故で被ばくした人

東京電力の福島第一、第二原発事故でこれまでに被ばくした人は次の通り。（発表内容に重複がある可能性があり、被ばくの定義は発表者の判断による）

【政府災害対策本部発表】

- ▽東電社員9人と協力会社8人の計17人が顔面に放射性物質が付着
- ▽蒸気を外部に放出する作業をしていた作業員1人が被ばく
- ▽警察官2人が被ばくしたが、除洗完了。ほかに被ばくした消防官は確認中。
- ▽双葉厚生病院から避難していた3人が被ばく
- ▽バスで避難していた9人が被ばく

【東京電力発表】

- ▽水素爆発で作業中にけがをした男性社員ら6人が被ばく。うち5人は除洗済み。

【文部科学省発表】

- ▽水素爆発で作業中にけがをした男性自衛隊員が被ばく

【新潟県発表】

- ▽原発周辺の放射線を調べるため福島県に派遣した職員2人が微量の被ばく

23.3.14 チェルノブイリ級「あり得ず」

玄葉氏 原子力委の見解示す

福島第一原子力発電所で3号機の建屋が爆発するなど緊迫した状態が続いている問題で、玄葉光一郎国家戦略担当相（民主党政調会長、衆院本県3区）は14日午後、国会内で開かれた同党「東北地方太平洋沖地震対策本部」総会で、東京電力福島第一原発の事故に関し、

「絶対にチェルノブイリ（級の事故）はあり得ない」とする原子力安全委員会と原子力安全・保安院の見解を明らかにした。

また、本県選出の民主党の渡部恒三元衆院副議長（本県4区）、太田和美衆院議員（本県2区）ら6人が14日午後、首相官邸で海江田万里経済産業相と会い、情報の開示や住民の安全対策に万全を期すよう申し入れた。

海江田氏は

「菅直人首相に伝える」

と応じた。申し入れ後、渡部氏は記者団に

「県民が非常に心配している。皆さんの安心安全のため、100%を超える努力をするようお願いした」と述べた。



玄葉光一郎
国家戦略担当相



渡部恒三
元衆院副議長



太田和美
衆院議員



海江田万里
経済産業相

23.3.14 120チームで被ばく調査

県、全身除染基準を設定

県は15日から避難所に避難している県民の被ばくの有無を調べる「スクリーニング調査」を120チーム編成で実施することを決めた。

国からスクリーニングチームが派遣されることを受け、県内約500カ所の全避難所を巡回する。15日に調査する日時と場所を公表する。

県は14日、スクリーニングで全身除染を行う場合の基準を設定した。毎分100,000カウント以上で、全身除染する。毎分13,000カウント以上から毎分100,000カウント未満の数値が検出された場合、部分的な拭き取り除染をする。文部科学省から本県に派遣された専門家や福島医大の取り扱い例を踏まえ設定した。県は政府対策本部と政府現地対策本部にスクリーニングチームを少なくとも100チーム以上派遣するよう要請した。佐藤雄平知事が同日、吉田泉財務政務官（衆院本県5区）に要請書を渡した。

県は14日も前日に引き続き、二本松市の県男女共生センターと郡山市の郡山総合体育館、田村市の市総合体育館などでスクリーニングを実施した。

23.3.14 放射線通常の260倍 第二原発付近

東京電力によると、14日夜、福島第一原発2号機から微量の放射性物質を含む水蒸気が放出された後、10⁴離れた福島第二原発付近で通常の260倍となる9.4マイクロシーベルトの放射線量が検出された。

東電は14日午後10時13分、福島第二原発の敷地境界放射線量が原子力災害対策特別措置法第10条第1項の規定に定められた放射線量を超える量が検出されたとして、経済産業省原子力安全・保安院など関係行政機関に通報した。

東電は

「健康に影響を与える数値でない」

と説明している。

23.3.14

「原発難民」疲労濃く 相次ぐ福島第一爆発

ガソリンなく避難断念 見えない恐怖との闘い

「原発で一体何が起きているのか」

「爆発は防げなかったのか」。

大熊町の東京電力福島第一原子力発電所 3 号機が水素爆発した14日、避難指示区域外の他の自治体の避難所に逃れた被災者から不安とともに怒りの声が上がった。

ガソリンが枯渇し、逃げたくても地元を離れられない住民も少なくない。大震災の被害はどこまで広がっていくのか。見えない恐怖との闘いも続いている。

「慌てて逃げて来た。一体いつ帰れるのか」ー。

避難指示区域から急ぎょ、田村西部工業団地内のデンソー東日本にバスで移動してきた大熊町民らは、陰しい表情で新工場内の避難所に駆け込んだ。

大熊町民約 1 万 1 千人のほとんどが田村市内に避難している。3 号機の爆発の瞬間を避難所のテレビで見た大熊町の主婦（52）は

「あまりの煙の大きさに驚いた。自宅にいつ戻れるのか」と肩を落とす。

会社員小沢裕矢さん（30）は爆発した 3 号機で働いた経験がある。

「仕事がないと生活できない」

と話し、一日も早い原発の安定を願う。ただ、

「原子力発電所を怖いと今回初めて思った。この子たちのためにも、国の責任で汚染を除去してほしい」

と長男（5つ）、長女（4つ）を抱きかかえ、強い口調で語った。同町の無職男性（86）は「1 号機は運転開始からまもなく40年を迎える。継続運転しようとしていたことがそもそもの間違い」

と、12日の福島第一原発 1 号機の爆発に触れ、顔ををしかめた。

隣接する双葉町の佐藤浩美さん（42）は

「（放射能の）線量は大したことないというのに、立ち入り制限があるのは一体どういうことか」

と戸惑いを口にした。



23.3.14 東電、初の計画停電 首都圏大混乱

東京電力は14日、地域ごとに交代で電気を止める「計画停電（輪番停電）」を茨城、千葉、山梨、静岡の 4 県の一部地域で実施したと発表した。東電が計画停電に踏み切ったのは初めて。15日以降も18日まで実施地域、時間帯を示しており、計画停電は、少なくとも 4 月末まで続く見通しだ。

東電は茨城県の鹿島、静岡県県の岳南の両変電所からの送電をストップ。機械的に抽出して止めたと説明しているが、茨城県鹿嶋市、千葉県旭市など被災地も含まれる。

東電は14日朝から、管内 9 都県を 5 つのグループ地域に分けて順次、3～6 時間程度ずつ停電を行うとしていた。しかし、第 1～4 グループ地域は電力需要が想定を下回ったとして、実施を見送った。電力のピークを迎える午後 5 時から、第 5 グループ地域のうち、山梨県富士川町、静岡県富士宮市などの一部で実施した。

J R や私鉄など鉄道各社は、東電が13日に計画停電を発表したのを受けて、14日の運行本数を大幅に減らした。このため、首都圏を中心に通勤・通学が大混乱に陥った。

23.3.14 被災地「無計画」停電

東京電力は計画停電を東日本大震災により被害を受けた地域の避難所で実施するなど、ずさんな対応に終始した。情報の周知は遅れ、説明も二転三転。同社の「無計画」ぶりが、市民生活や企業活動の混乱に拍車を掛けており、批判が高まっている。

東電は14日午前、予定していた第一グループ内の計画停電をめぐり「見送る」「実施の可能性はある」と説明が二転三転。結局、午前は見送り第5グループの一部地域で午後5時すぎから踏み切った。しかし、対象地域を公表したのは停電が始まってから。しかも当初は茨城、静岡両県の一部で実施したと発表したにもかかわらず、停電の終了後に千葉、山梨両県の一部でも行ったと訂正する混乱ぶりだった。

23.3.14 大熊町長「予想を超える被害」

双葉町長「電力会社対応責任」

田村市総合体育館に対策本部を置く大熊町の渡辺利綱町長は

「今回の被害は予想を超えている。原発の安全神話がこんな形で崩れるとは…」

と顔をゆがめた。

「どうしてこんなことになるのか。原発の今の正確な情報が欲しい。町民にも情報を提供したいが連絡がない」

とのいらだちも口にし、速やかな情報開示も求めた。

双葉町の井戸川克隆町長は、町の対策本部を置く川俣町体育館合宿所のテレビで福島第一原発3号機の爆発を知った。町民からは物資の要望のほか、放射性物質に対する不安の声も聞いており、

「これ以上被害が拡大しないよう、電力会社は適切に対応する責任がある」と強い口調で話した。



田村市総合体育館の対策本部で苦難の表情を見せる渡辺大熊町長＝14日午後1時15分ごろ



川俣町体育館合宿所の対策本部で被害の拡大防止を求める井戸川双葉町長＝14日午前11時ごろ

23.3.14 葛尾村民、福島へ避難

福島第一原発2号機の原子炉内の水位低下を受け、葛尾村は14日夜、村民に福島市への避難を防災無線で呼び掛けた。同日夜から15日未明にかけ、多くの村民が村営バスや車で福島市に入った。

23.3.14 活動中の警官退避

爆発で県警

14日、福島第一原発3号機の爆発を受け、3号機の半径10*以内で活動中だった警察官に退避命令を出した。

車輦のスピーカーから住民に待避を呼びかけながら避難。健常者は車輦に乗せた。寝たきりなど移動が困難な人は屋内にとどまり、外気が入らないよう鍵を掛けることを呼びかけた。

23.3.14 浪江町対策本部 周辺に避難者 1 万人超

浪江町によると、町の対策本部は同町津島地区の津島支所に設置しており周辺にはまだ 1 万人以上の避難者がいる。福島第一原発 3 号機が爆発し、避難指示区域が拡大しても大半の車にガソリンがなく、逃げたくても逃げられない状態という。

浪江町議の 1 人は 13 日、県の対策本部に出向き、
「津島地区にガソリンが欲しい」と訴えた。自身の車もガソリンがなくなりかけ、ガソリンスタンドを探し回った。車中泊し、津島地区に戻る途中で 3 号機の爆発を知ったという。町議は
「もっと早く手を打てなかったのか。悔しい」と涙ながらに話した。

23.3.14 県に輸送用車両手配要請を検討

浪江町対策本部

福島第二原子力発電所で爆発が続いたことを受け、浪江町の対策本部は 14 日、避難場所に行っていた同町津島地区から住民が移動するための輸送用車両の手配を県に要請することを検討している。

23.3.14 町は全滅

双葉からの避難者怒りあらわ

「町は全滅だ。東電はもっと早くに海水を注入できなかったのか……」。
川俣町体育館の合宿所に避難している双葉町郡山行政区長の佐藤一夫さん（69）は怒りをあらわにする。双葉町出身の大井川健悟さん（43）は
「東京の親戚宅を頼りたいが、両親と連絡がつかず動けない」と焦りの表情を見せた。
浪江町議戸から避難した柴孝一さん（73）は福島第一原発での 2 度目の爆発を知ると、
「大津波で家が流され、原発が爆発した。もう何も残っていない」と力なく話し、家族と一緒に東京の親戚宅に再避難した。

23.3.14 聞いたことのない爆発音

飯野への避難者語る

「聞いたことのない爆発音だった」
「地鳴りかと思ったら爆発だった」。
南相馬市から福島市飯野町の飯野地区体育館に避難した会社員市沢芳英さん（43）は青ざめた表情で語った。
両親や姉と一緒に避難するかとどまるかを話し合い、乗用車のガソリンが少なくなったため、軽乗用車から燃料を移し替える作業をしている最中だった。
「とどまるのは危険過ぎる。避難しよう」。
爆発音を聞いてすぐに決めた。
「どこが安全なのか分からない。この避難所で本当に大丈夫なのか」。
市沢さんは言い知れない不安感を明かす。
南相馬市の病院に勤務する小野田修一さん（42）は兄弟夫婦ら 5 家族 15 人で同体育館に避難した。前日、小高町の病院から患者ら約 60 人を受け入れたばかりだった。勤務する病院は 20^時 圏外だが、3 号機爆発の報道後、病院長から

「病院の機能は停止した。残るか、避難するか判断はそれぞれに任せる」
との連絡を受け、乳児がいたため避難を決めた。小野田さんは

「一家が離れ離れになるわけにはいかない。小さな子どもを守らなければ」
と話した。

浪江町に住む土木作業員の場重男さん（63）は同体育館が3カ所目の避難場所となった。
11日の地震後、いったんは自宅に戻ったが、相次ぐ爆発事故の報道を受け、避難を続けている。

「給油に向かった妻の兄らと連絡が取れない。連絡する方法はないか」
と表情を曇らせた。

23.3.14 離れるわけにいかぬ

一部20⁺㊦圏内田村市都路

とどまる農家も

避難指示の範囲が半径20⁺㊦に拡大された東京電力福島第一原発。多くの住民が慌ただしく避難所に向かったが、自宅にとどまる決断をした人たちもいる。畜産農家など生き物を抱える人たちだ。

「一日たりとも離れるわけにいかない」。

農家の思いに、避難を呼び掛ける自治体の職員も困惑している。

避難指示の範囲拡大で、田村市都路町の一部が圏内に。市は12日夜から都路町全体に避難を指示したが、13日夕の段階で畜産、酪農、養鶏の農家など30～40人が現地にとどまることを希望しているという。地元消防団などを通じて避難するよう説得を続けているが

「離れたくないという意味は強いようだ」

と市職員。経営者ら4人が残っているという都路町の養鶏農場では、電話に出た女性が

「ニワトリを残しては行けない」

と話した。

原発からの距離は約22⁺㊦。

「だから大丈夫と決めたわけではないが…。避難指示が拡大したら、すぐに避難する」。
落ち着いた声だったが、不安は隠せない様子だった。

酪農家2軒の残留を確認しているという「たむら農業協同組合」の佐久間浩幸営農経済部長は

「乳牛は一日でも搾乳をしないと乳が出なくなる」

と、農家の気持ちを思いやる。

県養豚協会の男性職員（25）も

「夜は寒いし（留守にすれば）子豚なんか何日ももたない」

と話す。

「避難から戻って、仮に豚が無事だったとしても、被ばくしていたら口蹄（こうてい）疫
みたいに殺処分になるのだろうか」

と、別の心配も口にした。市の別の職員は

「住民の命が最優先だが、農家にとって、家畜が死んでしまうということは、生活の手段
を失うことだ」

と指摘。

「市としては説得を続けるしかないが、避難か残留かは究極の選択。原発事故が少しでも
早く収束してほしい」

と願った。

23.3.14

続く避難生活

浜から中通りに次々

地震発生時の恐怖さめず

避難指示が出された浪江町、南相馬市など原発立地町の住民約500人を受け入れた福島市の福島高体育館。南 相馬市小高区井田川の高橋タキ子さん（80）は病気で動けない入院中の夫を小高町内に残して避難した。

「夫は今どうしているのか分からない。家は流されてしまった」。

やつれた表情で話し

「大丈夫だと言われていたのに地震に耐えられなかった。電力会社に今後の生活を補償してほしい」と強く求めた。

福島第一原発に勤務する浪江町請戸の協力会社社員渡部真人さん（29）は、地震発生時は5号機の地下にいた。地上に出ると一面がほこりに覆われ、視界が悪かったという。

解散命令が出てすぐに家に向かったが、家は津波で流されていた。難を逃れた妻、幼い子ども2人と避難所で合流し、親戚宅や避難所を転々とする生活が続く。

「まさか爆発するとは・・・。この先、仕事はどうなるのか分からない」と複雑な思いを口にした。

海外メディアも続々と訪れ、スウェーデンの国営ラジオ局や中国の主要週刊紙の記者は

「原発についてどう考えるか」「政府の対応をどう思うか」

などと原発などへの見解を聞いていた。

福島市飯坂町のパルセいいざかの避難所には大熊町の渡部光治さん（24）と浪江町の田中洋さん（34）の2家族が入った。2人は友人同士で、車中泊などをしながら2日かけ到着したという。二人は

「この先どうなるのか」

と不安げに話した。



浜通りからの被災者を受け入れている福島高で布団にくるまる子どもたち＝14日午前11時40分ごろ

23.3.14 万全で受け入れ

避難者4700人 川俣町官民挙げ

川俣町の避難所には町民の3分の1近くに当たる約4千7百人の避難者が町内の小学校や体育館など11カ所で生活を送っている。

町災害対策本部がある保健センターでは町連合婦人会員や町職員らが早朝午前3時半から炊き出しをはじめ毎食1トンの米で約5千個のおにぎりを作り、各避難所に届けている。避難者に半額サービスしている銭湯もあり、長い列ができています。

古川道郎町長は、刻一刻と変わる福島第一原発の状況に対し、

「浜通りの避難者はもちろん、町民の中にも不安に思う人はいる。被害が広がらないよう命懸けで頑張っている」と話した。



川俣町の銭湯の前に列を作る避難者ら＝14日午後2時30分ごろ

23.3.14 須賀川で原発避難者受け入れ

福島原発の爆発事故を受け、須賀川市の須賀川アリーナは13日夜から原発立地町の住民を受け入れ、14日午後5時現在まで約120人が利用している。定員は300人まで。

橋本克也市長は
「食料の見通しが確保されたため」
と受け入れの理由を説明した。

23.3.15

高濃度放射能漏れ

屋内待避 30^分に拡大

福島第一原発 2号機損傷、4号機爆発



米シンクタンク、科学国際安全保障研究所（I S I S）が公表した、14日に撮影された福島第一原発の衛星写真。（矢印下から順に）12日の爆発で建屋が損傷した1号機、15日に爆発が確認された2号機、14日の爆発で建屋が損傷した3号機。上は4号機（デジタルグローブ・I S I S提供・共同）

23.3.15 放射線量、極めて危険

3，4号機敷地内

東電福島第一原発3号機の敷地内で15日午前10時、極めて危険性の高い1時間当たり400^{mSv}シーベルトの放射線量が検出された。県が15日、発表した。

東電が地上付近に備え付けている計器による測定で、3号機の水蒸気爆発で出た放射性物質の付着した落下物に反応した可能性があるという。同じ時間に、4号機敷地内では100^{mSv}シーベルトが検出された。一方、同日午前9時の第一原発正門付近の測定では通常の約23万9千倍に当たる11,930マイクロシーベルトが検出された。県は2号機で確認された爆発音と関連する可能性があるかとみている。ただ、午後に入り数値は徐々に低下、午後2時には928.2マイクロシーベルトとなった。

23.3.15

避難拡大・・・ぼう然

原発危機 住民 怒りと焦り

「人材だ」「対応後手」

東京電力福島第一原子力発電所の危機的状況が高まった15日、新たに屋内退避要請区域となった30[※]。圏内の住民らに不安と、いい知れない怒りが広がった。一刻も早く、少しでも遠くへ車を走らせる家族。一緒に避難できず離ればなれになる親子。

「津波は天災だが原発事故は人災」

「古里に二度と戻れないのでは」。

長引く避難所生活者には逆戻りした肌寒さが追い打ちをかける。国内でも前例のない事態に県民が翻弄（ほんろう）されている。

原発から26[※]ほど離れた南相馬市原町区。会社員伊賀正志さん（58）は、犬やリクガメ、九官鳥など10数匹のペットと暮らす。妻と娘夫婦は前日の14日に、生まれたばかりの孫と山形市へと避難した。

「一緒に行こう」

「置いて行けない」。

ペットのことを考えて残った。屋内退避要請が出てから一步も外に出ていない。

「運転免許がないから、万が一の場合、どうすればいいのか…」

と不安を口にした。

同じ原町区の50代の男性は屋内退避要請を知り、保険証と現金を持ち、妻と次男を連れて車に乗った。しかし、公務員の長男は残った。職務を貫く息子連れて来られなかった。

南相馬市役所では国の要請を受け、職員が庁舎内の換気扇を止め、外気が入らないようにした。市内に広報車を走らせ周知徹底にも努めている。同市は15日、相馬市の相馬東高、飯館村の白石小、伊達市役所を避難所に指定した。

また、市は避難指示に備えて市外の避難所、住民輸送用バス、ガソリン確保などの準備に入っている。バスを確保できる見通しは立たず、県内外に協力を呼び掛けでいる。

いわき市で最北部の久之浜地区の一部がエリアに入った。久之浜地区の住民の一部が避難した常磐藤原町の藤原小体育館に避難してきた70代の女性。

「どうしていいのかわからない。近所の人々が津波で不明になっている。いつまでこの避難生活が続くのか」

と不安を募らせた。

中心市街地の平のJRいわき駅前などは屋内退避のエリア外だが、ほとんど人通りはなく、車もまばら。営業している店も皆無に近い状態で、ひっそり静まり返った。

いわき市田人町の田人ふれあい館の避難者たちは、陰しい表情でテレビ画面に見入り深いため息を漏らした。家族四人で避難している同市平の男性会社員（58）は

「今回の爆発でどれくらいの放射能が漏れているのか、人体に影響がある範囲は半径どれくらいなのか、政府や東京電力ははっきり示してほしい」

と見えない放射性物質の恐怖を語った。

同市四倉町の男性中学教諭（57）は

「津波は天災だが、原発事故は人災。1号機の爆発以来、対応が後手後手に回っているため被害がどんどん拡大している。専門家が大勢いるはずなのに」



屋内待避指示の範囲が拡大された後、いわき市田人町の田人ふれあい館で不安げに受け付けをする住民＝15日午前11時50分ごろ

と語気を強めた。

田人ふれあい館には14日夜、市内外から約30人が避難していた。しかし、第一原発2号機の異常事態が次々と伝えられると、

「新潟県まで逃げる」

「取りあえず東京方面に行く」

と荷物を抱えて車で立ち去った。

館内は念のため暖房が止められ、ロビーには避難者に対し

「雨に当たらないようにし、窓を閉め、不要・不急の外出をお控えください」

と呼び掛ける市災害対策本部の文書が掲示された。

23.3.15 会津に被災者殺到

会津地方には浜通りから被災者が次々と避難している。

会津若松市のあいづ総合体育館には約350人の被災者が入った。そのほとんどが浪江町や南相馬市など市外の住民。

浪江町で飲食店「杉乃家」を営む芹川輝男さん（61）、春子さん（61）一家は南相馬市、川俣町、郡山市と避難所を転々とし、会津に到着した。

「こんなにひどいことになるとは。

すぐ帰れると思っていたのに」

と疲れた表情。

週3回人工透析が必要な浪江町の主婦穴戸いく子さん（59）は会津に着き、病院に駆け込んだ。

会津若松市の東山・芦ノ牧温泉でも浜通り地方からの被災者が殺到している。

自主的に被災者の無料受け入れを13日から開始した東山温泉の旅館くつろぎの宿・千代滝と新滝では、15日現在、被災者は約1000人に上っている。

喜多方市でも被災者の受け入れが始まりいわき市、南相馬市などの家族らが押切川公園体育館に身を寄せた。避難者は午後六時現在で約40人。

南相馬市小高区の会社員高田直則さん（41）は親族12人で避難してきた。

「政府や東電の発表は信用できない」

と目まぐるしく変わる情報に翻弄（ほんろう）される苦悩をにじませた。

猪苗代町は町総合体育館（カメリーナ）を避難所に指定し避難者を受け入れ、南相馬市、大熊町、富岡町などから38人が避難している。

大熊町の男性（51）は当初、川内村の実家に避難したが、原発事故の影響を懸念し家族や親族らと車三台に分乗して猪苗代町へ逃れた。

「（原発事故で）避難生活の長期化は避けられない」

とうつぶいた。

南会津町にも浜通り方面からの被災者が入り始めた。

町内永田の町高齢者センターには南相馬市などの特別養護老人ホームの入所者やスタッフ約80人が入った。浜通りから会津地方に移動する被災者が数千人規模となり、会津の市町村は収容施設の確保に苦慮している。

会津若松市では今後は小中学校の体育館を充てることも検討する。おにぎりなどの食料手配も限界に近づいている。スーパーからの調達では足りず、16日からは日赤奉仕団や市職員らが炊き出しをして、被災者増に対応する。ボランティアの協力も募っていく。



会津若松市のあいづ総合体育館に浜通りなどから避難してきた大勢の被災者＝15日午前10時30分

23.3.15 「いわき」ナンバー 県中などに目立つ

原発事故に伴う避難指示や屋内待避を受け、県中、会津の両地方などに相双地方やいわき市を離れた人の車が目立つようになった。

郡山市内では正午前から「いわき」ナンバーが多数走るようになった。新潟県柏崎市へ向かう広野町の男性（46）は親戚も含め車3台に分乗して自宅を出た。男性は

「もうガソリンがない。中通りに来ればあると思ったが…」
と疲れ切った様子だった。

23.3.15 折れそうな心 支援が支えに

富岡町の主婦（43）は15日から2カ所目の避難所となる郡山市のあぶくま養護学校に身を寄せた。地震発生翌日の12日から川内村に避難した。情報不足にいら立ったが、温かな支援が折れそうな心を支えた。その矢先、東電福島第一原発2号機の燃料棒が露出し、

「早く西に逃げて」
と促され、慌てて村を出た。同校の体育館に荷物を運び込んだ直後、退避エリアの拡大が発表された。

「富岡には永遠に戻れないのかな」。
深いため息をついた。

23.3.15 浪江津島から8000人 二本松

二本松市は15日、浪江町津島地区周辺にいる避難者ら約8000人の受け入れを決め、市内の旧小学校や体育施設など計25カ所で受け入れを開始した。

津島地区周辺には福島第一原発3号機の爆発により避難指示区域が拡大しても、ガソリン不足などで逃げられない状態の人が多く、避難者は1万人以上いるとされている。

15日朝、浪江町対策本部長の馬場有町長らが隣接する二本松市を訪れ、同市対策本部長の三保恵一市長へ避難者受け入れを要請。同市は東和地域で昨年春に廃校になった7小学校や各地区体育館などで約8000人の収容が可能と判断した。

避難者のうち個人の車で移動できる人は15日午後から二本松市役所などで受け付けし、避難所へ入った。バスなどの手配が付き次第、随時移動する。

23.3.15

いら立つ知事

不眠不休で指揮 裏切られた無念にじむ

県民21～22万人が避難、屋内退避する未曾有の事態に発展した国内最大の原因災害。

福島市の県自治会館に置かれた県災害対策本部は15日、県の担当者が国との連絡やマスコミ対応に終日、追われた。しかし、関係機関の混乱は続き、得られる情報は、わずか。関係者の疲れと、いら立ちはピークに達した。

午前10時すぎから始まった対策本部の定例会議。

不眠不休で復旧対策を指揮する本部長の佐藤雄平知事が立ち上がり、充血した目をむき、声を張り上げた。

「原発災害は国、事業者に事態収束を強く、強く要望する」。

知事就任から4年4カ月。国と東電に原発の安全管理の徹底を再三、求めながら裏切られた怒りが言葉の裏側にこもった。

それから2時間後。県生活環境部の荒竹宏之次長が菅直人首相の避難、屋内退避要請を伝えるため報道陣の前に立った。第一原発の半径20～30*。圏を屋内退避とした理由を問われ、「国が決めたこと…」

と言葉に窮した。いつまで退避すればいいのかと食い下がる記者には

「時期は聞いていない」

と答えるのが精いっぱいだった。緊急事態にもかかわらず、首相官邸から十分な情報が届いていない実態が浮き彫りになった。情報不足は原発の事故、トラブルを記者団に伝える東電関係者も同じだ。福島第一原発4号機の火災発生を知らせる会見では、出火場所にある機材や延焼中かどうかを問われて口ごもり、マスコミから「出直し」を求められた。

24時間体制で被害状況の把握に当たる対策本部の県職員にも疲労の色が濃い。第一原発4号機のトラブルを報じるテレビニュースを横目に、防災関係職員がつぶやいた。

「原発なんて化け物を受け入れたわれわれは、何と愚か者だったのか」



原発災害の早期収束を求める佐藤知事

23.3.15 国と東電 やっと統合本部

政府は15日、炉心冷却作業が難航している東京電力福島第一原発への対策を一体化するため、菅直人首相を本部長とする政府と東電の「福島原発事故対策統合連絡本部」を設置した。

首相は午前の記者会見で

「放射性物質の漏えい拡大を防げるように全力を挙げて取り組んでいく。国民のみなさまは冷静に行動をしていただくよう心からお願いする」

と呼び掛けた。

午後の緊急災害対策本部で首相は、救命活動から物資配布などの被災者支援に重点を置く考えを表明した。

「救出活動は続けるが、多くの方が避難所等にいるので、そういう皆さんへの手当てに比重を移す」

と述べた。



菅直人首相

23.3.15

「撤退したときには東電100%つぶれる」

首相、社員に不満爆発

「あなたたちしかいない。撤退など有り得ない。覚悟を決めてください」。

東京電力福島第一原子力発電所の危機的状況が続く中、菅直人首相は15日朝、東京・内幸町の東京電力本社に乗り込み、危機管理対策に全力を挙げるよう東電関係者に強い口調で迫った。

首相は午前5時半すぎに東電本社に到着し、約3時間滞在。首相は

「撤退したときには、東電は百パーセントつぶれます」とも強調した。同原発1号機が12日に水素爆発した際は、東電からの首相官邸への報告が遅かったとされ、首相は15日も東電社貞の前に

「テレビで爆発が放映されているのに、官邸には連絡がなかった。一体どうなっているんだ」と不満を爆発させた。

首相の東電滞在中、空だき状態が続いていた2号機で爆発音がし、周辺で高い値の放射線量が確認された。



厳しい表情で官邸に戻る菅首相＝15日午前8時46分

23.3.15

放射能 福島、通常の478倍

県「健康に影響はない」

県が県内7方部で行っている放射能の常時測定調査（15日午後9時現在）で、福島市で午後7時、通常の約478倍に当たる1時間当たり23.88マイクロシーベルトが検出された。

県は福島第一原発の水素爆発など一連の事故、トラブルの影響とみている。

福島市の調査結果は同日午後3時の測定まで正常値の0.05～0.09マイクロシーベルトの範囲を推移していた。その後、徐々に上昇を始め午後5時には20.26マイクロシーベルト、午後6時には23.18マイクロシーベルトに達した。

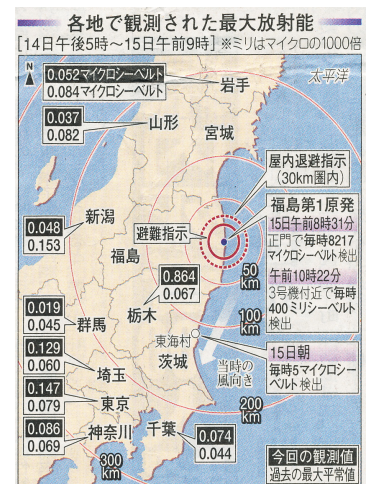
一方、いわき市で同日午前4時、23.72マイクロシーベルトが検出されたが、午後には1マイクロシーベルト台に低下した。

郡山市で午後2時5分に8.26マイクロシーベルト、白河市で午後9時に7.56マイクロシーベルトをそれぞれ検出。南相馬市は終日、2マイクロシーベルト台が続き、午後8時の4.62マイクロシーベルトが最高だった。南会津町は午後5時20分の1.08マイクロシーベルト、会津若松市は午後8時と午後9時の1.18マイクロシーベルトが最も高かった。

ただ、県は「いずれの市町の測定結果も健康に影響を与える範囲ではない」としている。測定場所は次の通り。

▽福島＝県北保健福祉事務所▽郡山＝麗山公園▽白河＝県南合同庁舎▽会津若松＝会津合同庁舎▽南会津＝南会津合同庁舎▽相双＝南相馬合同庁舎▽いわき＝いわき合同庁舎

◇ ◇



県は15日、福島第一原発から22～4.0^キの6地点の放射能の測定調査（15日午後8時現在）も発表した。飯館村は午後4時から20マイクロシーベルトを超え、午後6時20分には44.7マイクロシーベルトを記録した。健康に影響を与える範囲ではない。

測定場所は次の通り。

▽南相馬＝南相馬合庁▽飯館＝飯館村役場▽葛尾＝葛尾村役場▽川内村＝川内村役場▽いわき＝中央台北小▽田村＝船引田村総合体育館

23.3.15 放射能、関東にも拡大

関東各地でも15日、通常より高い放射線量が観測された。茨城県内では最大で通常の100倍程度の毎時5マイクロシーベルトを観測。神奈川県内でも通常の10倍近い値が出た。東京都も文部科学省は都道府県に委託している環境放射能水準調査の測定頻度を可能な限り引き上げるよう要請した。

23.3.15 自宅退避住民の早期避難を提言

佐藤参院議員

放射能物質漏えいなどの災害対策に詳しい自民党の佐藤正久参院議員（比例、福島市出身）は、事故の長期化を想定し、自宅退避の住民を早急に安全な地域に避難させるべきと提言している。

佐藤氏は

「屋内に1週間も閉じこもるのは困難。原発から30^キ以上離れた場所に移動させ、事故の長期化に備えることを考えた方がいい」

と話した。佐藤氏は福島第一原子力発電所で放射能物質漏えいに対応する陸上自衛隊化学防護隊に所属していたことがある。



佐藤正久参院議員

23.3.15 拡大阻止に全力

官房長官が強調

枝野幸男官房長官は15日午後の記者会見で、東京電力福島第一原子力発電所の事故で高濃度の放射性物質が漏れたことについて、

「大変残念に思っている。これを悪化させることなく、何とか改善の方向に持っていけるようさらに努力したい」

と述べ、被害の拡大阻止に全力を挙げる考えを強調した。



枝野幸男官房長官

23.3.15 安全の「壁」崩壊

原発危機 トラブルの連鎖

言いしれぬ不安広げる

東京電力福島第一原発の危機が止まらない。1～3号機の事故に加え、15日は定期検査で停止中の4号機でも火災が発生。2度にわたって燃料が水面から完全に露出した2号機では、原子炉格納容器の一部が損傷した。防護のため幾重にも重ねたはずの「壁」が次々と崩壊。トラブルの連鎖は、言い知れぬ不安を広げている。

14日午後、炉心に水を注ぐ装置が止まり冷却能力を失った2号機。東電は、この日午前にかきた3号機の水素爆発の衝撃が、原因となった可能性があるとの見方を示した。

隣り合った原子炉で続いて起きた重大な事故。不気味な共鳴は、事態の深刻さを増幅させた。

「1つの原発に6基もの原子炉が集中することこそ問題だ」。

山下俊一長崎大教授（被ばく医療）は指摘する。一つの建屋で放射性物質が漏れると、被ばくの恐れから他の建屋への接近も難しくなる。つまり、トラブルが一つ起きると

「別のトラブルに対処できなくなる」というのだ。

原子力技術に詳しい評論家の桜井薄さんは

「海外では一つの原発に1～2基が常識」と話す。日本では、原発を受け入れてくれる土地が限られるため、原子炉の集中立地を余儀なくされたことが今回の問題の遠因になっているという。



山下俊一長崎大教授



桜井薄氏

■不足する人員

冷却能力を失った2号機では14日夜、外部からのポンプで海水を注入する作業が始まった。ところが、職員が目を離したすきにポンプ用燃料が切れて停止してしまうミスが起きて水位が急速に低下。核燃料が水面から完全に露出し、空だき状態になる前代未聞の事態に陥った。いったんは水位が回復したものの、原子炉圧力容器の蒸気の逃し弁にトラブルも起き、再び燃料が全露出。これが15日朝、炉心の一部溶融と格納容器内の爆発につながったとみられる。2号機は、安全のため築かれた「5つの壁」のうち、建屋、燃料被覆管、格納容器と3つまでに穴が生じたことになる。

山下教授は

「数少ない現場作業員に任せっきりでだめだ」

と批判する。2号機の爆発以降、第一原発は800人いた作業員のうち50人を残して避難した。

「（旧ソ連の）チェルノブイリ原発事故では数万人を投入した。福島原発でも千人単位を現場に送り、封じ込めに当たらせるべきだ」

と、東電や国の対応は不十分だと指摘する。

「人間の集中力には限界がある。交代要員もいない中、異常な緊張感に何日も耐えられるわけがない。ミスも起きやすくなる」

と山下教授はいう。

■根本的な対処を

4号機では15日、水素爆発が発生。使用済み燃料があるプールの水位を保っていたポンプが地震で動かなくなり、水位が低下。燃料が露出したため起きたとの見方があり、停止中でも起きた爆発事故に衝撃が広がった。

東電は同様に停止中の5、6号機では非常用発電機でポンプが作動しており、当面心配はないとする。しかし、相次ぐ「想定外の事態」が、東電への信頼を突き崩した。

さらに、15日は原発敷地内での放射線量が、ついに最高の400ミリシーベルトを記録した。

安斎育郎立命館大名誉教授（放射線防護学）は

「一連のトラブルに有効な対策が打てない原因は、どこからどれだけの放射性物質が漏れているのか、特定できていないからだ」

とし、詳細な線量計測を行い根本的な対処を求める。

多くの課題を背負い、福島原発の行方は見えないままだ。



安斎育郎
立命館大名誉教授

23.3.15 東電混乱、動揺の会見

終わらない状況に憔悴

「危険な状況が続いている」

「聞いたことがない事態だ」。

福島第一原発2号機（大熊町）の圧力抑制室で爆発音がしたことを受け、15日午前8時半ごろから東京電力が東京都千代田区の本社で開いた記者会見。担当者らは青ざめた表情で声を震わせた。

報道陣からは、周辺住民が退避する距離をさらに広げるべきではないかとの質問が相次いだ。担当者は

「検討させていただきます」

「預からさせていただきます」

と繰り返すのみで、即答を避けた。

一方で、圧力抑制室内が外気と同じ気圧になったと認め、

「異常なものと考えている」「健全性が損なわれている」

と回答。対応策があるのか問われると、

「海水切注入を続けるしかない」

と答えるのがやっとだった。圧力抑制室の損傷、爆発については

「これまで私が知る範囲では、聞いたことがない」。

「抑制室のどこで爆発が起きているのかも分からない」

とし、東電内部でも混乱している様子がうかがえた。状況について端的に答えるよう求められると、一瞬沈黙した後、絞り出すように

「危険な状況が続いているということでございます」

と話した。

午前11時ごろから始まった再度の会見では、枝野幸男官房長官が公表した福島原発付近の放射線量の値について質問が集中。100～400^ミシーベルトという数値の確認を迫られた担当者は

「確認していない」

「情報が届いていない」

と目を何度もしばたかせ、動揺をさなかつた。

「申し訳ございません」

と繰り返しながらも

「情報を隠しているわけではない」

と反論。終わりの見えない状況に憔悴（しょうすい）した表情を浮かべた。



福島第一原発について記者会見する東京電力の担当者（左側）＝15日午後、東京都千代田区

23.3.15 玄葉氏ら懸念の声

東日本大震災で被災した東京電力福島第一原発の情勢緊迫を踏まえ、15日の閣議後会見では閣僚から懸念の声とともに、対応を急ぐ考えが示された。

玄葉光一郎国家戦略担当相（民主党政調会長、衆院本県3区）は

「非常に憂慮している」

とした上で

「ありとあらゆる事態を想定した対応策をとるべきだ」

と指摘。片山善博総務相も



玄葉光一郎
国家戦略担当相



片山善博総務相

「事態は容易ならざる状態にある」
との認識を示した。

23.3.15 スリーマイル以上「レベル6」の見方

仏核安全局（ASN）のラコスト局長は14日の記者会見で、東日本大震災で被災した東京電力福島第一原発の事故の深刻さについて、史上最悪とされる旧ソ連のチェルノブイリ原発事故（1986年）ほどではないものの、米スリーマイル島原発事故（79年）を上回るとの見方を示した。AFP通信が伝えた。

事故の深刻さを示す国際原子力事故評価尺度（INES）のレベルで、チェルノブイリ事故は最も重い「7」、スリーマイル島事故は「5」。ラコスト局長は会見で

「日本の関係者と話した」
とした上で、福島原発の事故は
「レベル5を上回り恐らくレベル6に当たる感覚だ」
と述べた。

日本の経済産業省原子力安全・保安院は10日、今回の事故について、99年9月の茨城県東海村の核燃料抑加工会社ジェー・シー・オー（JCO）の事故と同水準のレベル4としていた。

23.3.15 原子炉冷却専門家8人を追加派遣 米国

米原子力規制委員会（NRC）のジャッコ委員長は14日の記者会見で、日本政府から東京電力福島第一原発の原子炉冷却に必要な機材提供の要請を受けたことを明らかにし、

「必要なあらゆる支援を提供する」
と述べた。

NRCはその後、声明を出し、専門家8人を日本へ追加派遣したと発表した。チームは既に東京入りしている沸騰水型原子炉の専門家2人と合流。事故対応の状況や放射能漏れの環境影響に関して情報収集を行い、要請に応じて技術的助言を行う。

ジャッコ委員長は会見で、福島第一原発で冷却機能が失われ、水素爆発が相次いだことに関し、

「深刻な状況」
と指摘。原子炉の冷却維持に
「あらゆる措置を取るのが現在の焦点だ」
と強調した。一方、
「日本が取っている措置は、米国で取りうる手法と合致している」
と述べるとともに、
「極めて困難な状況に非常に積極的な取り組みを続けている」
と評価した。



14日、ワシントンのホワイトハウスで記者会見する米原子力規制委員会（NRC）のジャッコ委員長（ロイター＝共同）

23.3.15 「悪い夢であって」

原発従業員 無念・・・

震災、爆発 壮絶な日々

「大地震、壊れた道路、誰もいない町……。どれも悪い夢であって欲しい」

川俣町の川俣南小で避難生活を送る浪江町酒井の豊田忠さん（59）は、古里の惨状が頭から離れない。大熊町の福島第一原子力発電所に勤務し、1号機が水素爆発した12日正門管理棟にいた。「ボンッ」という激しい爆発音とともに「ガタガタッ」と室内のガラスが震えた。

辺りを見回すと約2^{キロ}東にある1号機から黒い煙が上がり、北に流れていた、その時は何が起きたのかがよく分からなかった。

14日に出勤すると突然、「即刻避難」の指示が出た。ただならぬ雰囲気

「かなりの緊急事態だ」

と察し、家族が避難している川俣町方面に必死で車を走らせた。数時間後、今度は3号機が爆発した。

14日午後、川俣町内で家族と無事再会し、避難所では肩を寄せ、励まし合いながら過ごしている。豊田さんには、絶えず込み上げる思いがある。

「先が見えない」

「何もできない」

23.3.15 ニュースに不安げ

福島に避難被災者

福島市のあづま総合体育館では、大熊町の東京電力福島第一原子力発電所の状況を知らせるテレビに被災者が深刻な表情で見入った。

屋内、屋外にかかわらずマスクを着ける姿が目立ち浪江町の無職大和田好徳さん（75）は

「（政府や東京電力は）本当のことを話していないような気がする」

と不満をあらわにした。

福島市の福島三中の避難所には浜通りの被災者

約350人が入った。体育館内に設置されたテレビの前には、被災者が刻々と変わる福島第一原発関連のニュースを不安な表情で見つめていた。

知人と避難した浪江町大堀の主婦松田まゆみさん（60）は、屋内待避指示区域の南相馬市原町区に息子夫婦がいる。

「（息子は）避難したいがガソリンがないためできないと言っている。政府は避難者の交通手段を手配すべき」

と涙をぬぐい訴えた。



福島市のあづま総合体育館でマスクを着け原発のトラブルを伝えるテレビに見入る被災者ら＝15日11時ごろ

23.3.15 識者の話

避難、早く判断を 原発に詳しい技術評論家桜井淳氏の話

福島第一原発2号機は、高温の原子炉内に大量の蒸気がたまって設計圧を超え、最も壁の薄い圧力抑制プールが損傷してしまったのではないかと。原発の専門家であれば、こうした事態は予測できた。政府、東京電力も内部の状況が分かっておらず、既に燃料の大半が溶けるメルトダウン（全炉心溶融）が起きている可能性もある。大爆発を起こす危険性があり、大量の放射性物質が飛散すれば、最低でも半径50^{キロ}圏内の住民を避難させる必要が出てくる。避難には時間がかかる。政府は早く判断するべきだ。



桜井淳氏

海水の注入続けよ 住田健二大阪大名誉教授（原子力工学）の話

既に相当量の放射性物質が広範囲に漏れているのではないかと。非常事態に発展しそうだが、一体どうなるかわたしにも分からない。解決策があるなら教えてほしいぐらい。とにかく海水を注入し続け、原子炉を冷却するしか方法がないのでは。



住田健二
大阪大名誉教授

首都圏退避検討も 吉岡斉九州大大学院教授（科学技術史）の話

今後、事態がさらに悪化して炉心の一番中心にある原子炉圧力容器が破格すると、炉心燃料が溶け出して圧力容器を突き破る「メルトスルー」が起きる可能性もある。今、外へ放出されているのは揮発性の放射性物質だが、溶け出した燃料が水と接触すると蒸気爆発が起き、大量の放射性物質が放出されてしまう。チェルノブイリ、またはそれに準ずる対策が必要だ。30km²の屋内退避ということだが、100km²圏、首都圏でも退避を検討すべきではないか。



吉岡斉
九州大大学院教授

1, 3号機より深刻 木村浩東大大学院准教授（原子力社会工学）の話

2号機の爆発は、建屋が爆発した1, 3号機より深刻な事態だ。原子炉格納容器の損傷が事実なら、高圧力状態で閉じ込められていた放射性物質が一気に噴き出した可能性がある。しかし、風向きなどから考えて健康状態に直ちに影響が出る可能性は低く、住人は冷静に対応してほしい。



東大大学院准教授

23.3.15 東北電力でも計画停電

本県は除外 きょうから3日間

東北電力は15日、地域ごとに電気を止める「計画停電（輪番停電）」を16日から18日までの3日間実施すると発表した。戦後の一時期を除き初めて。

対象は秋田、山形両県と青森、新潟両県の一部。東日本大震災の被災地で、復旧作業が続いている本県と岩手、宮城両県、青森県の八戸市周辺、新潟県の十日町市と津南町は除外する。数カ月程度続くとみられる。

同社は南相馬市の原町火力発電所など太平洋側の火力発電所が被害を受け、宮城県の女川原子力発電所も運転を停止している。

16日から18日の闇は需要が1050万kWh程度と想定されるのに対して、供給は970万kWh程度にとどまり予備分を含め100万kWh程度不足するとみている。時間は午前9時からと午後5時からの各3時間。対象地域を8つのグループに分け、午前と午後で2グループずつ実施する。最終的には需給状況を見極め、当日の朝に実施の有無を決定する。

連休の19日から21日は実施しない。

海輪誠社長は15日、仙台市の本店で記者会見し、

「計画停電の実施については最低限の範囲にしたい」と述べた。

同社は電力の安定供給のために一層の節電を呼び掛けている。

問い合わせは同社コールセンターフリーダイヤル（0120）175566へ。



記者会見で計画停電について説明する
東北電力の海輪社長

23.3.15 東電は本格実施 栃木など8都県の一部

東京電力は15日、地域ごとに交代で電気を止める「計画停電（輪番停電）」を、初日となった14日に続いて実施した。停電は同日の午前7時ごろから午後10時ごろまで。栃木、群馬、埼玉、千葉、東京、神奈川、山梨、静岡の8都県の一部地域の計約5百万世帯が対象で、各地域で三時間程度停電した。東電は、管内のうち被災地となった茨城県などは当面、対象から外すことを決めた。

14日は一部地域の約11万世帯に限られたが、15日は対象を拡大し本格的なものとなった。16日も引き続き実施する方針。

23.3.15 東電の計画停電に苦言も

玄葉氏ら

東京電力が14日朝から開始した計画停電に対し、玄葉光一郎国家戦略担当相（民主党政調会長、衆院本県3区）は15日の閣議後会見で、国民生活が混乱を極めたことを受け、

「しばらく続くとすれば今のあり方がベストか検討した方がいい」

と苦言を呈した。細川律夫厚生労働相も

「東電の対応は非常にちぐはぐ。しっかりした対応が取れていない」

と説明が二転三転したことを批判した。



玄葉光一郎
国家戦略担当相



細川律夫厚生労働相

23.3.15 20[㊦]内740人搬送

県と県警 入院患者や高齢者

福島第一原発から半径20[㊦]圏内の医埴・特別養護老人施設の入院患者や入所者らの搬送作業を進めていた県は15日、把握していた要救助者計746人の救出を完了した。

15日早朝までに小高赤坂病院（南相馬）、西病院（浪江）、介護ドゥーヒル双葉（大熊）、オンフル双葉（浪江）、ひまわり荘（同）の職員や患者らが県の要請で派遣された自衛隊のヘリなどで救出が完了した。

県相双保健福祉事務所でスクリーニング検査を実施し、福島市の福島医大やいわき市のいわき光洋高等などへ搬送した。

残った双葉病院（浪江）の患者ら96人も同日中に搬送が完了した。

別の自治体に避難する場合、原則として住民を一斉に運ぶバスなどの手配は避難する人が居住している市町村が行い、避難所の指定は県害対策本部が調整して決める。

燃料がなく車が動かさないなど避難が難しい人がいる場合は市町村や県に連絡すれば、行政、消防、警察など関係機関が連携して避難を支援するという。

救助を必要としていた人は約750人おり、県や県警が14日から避難作業を進めた。県警はこのうち約450人を搬送。自衛隊も救助作業を行った。

警察庁は、政府が同日、20～30[㊦]圏内の住民に崖内退避を要請したことを踏まえ、自衛隊などとも連携し、屋外に出ないように呼び掛けるパトロールを実施。警視庁の放射線測定専門部隊も投入し、安全性の確認に努める。

23.3.15 屋内退避指示で捜索中止 南相馬

福島第一原発から20^{km}～30^{km}の住民に出された屋内退避の指示を受け15日、陸上自衛隊は南相馬市で予定していた行方不明者の搜索を中止した。南相馬市消防団も、搜索活動を屋内退避の広報に切り替えた。

23.3.15 相馬でも中断

相馬市もがれきの除去や行方不明者の搜索など屋外での活動を15日午前で一時中断した。

23.3.15 雨、雪に注意を

経済産業省原子力安全・保安院は避難指示や屋内退避の対象となっている東京電力福島第一原子力発電所から30^{km}圏内では雨や雪に注意を呼び掛けている。

雨や雪に放射性物質が含まれている恐れがある。やむを得ず外に出る場合は傘を差したり、雨がっぱを着るなどして肌に雨や雪が触れないようにすることが必要。

もし、触れた場合は水道水で洗い流すか、水がなければタオルで拭き取る対応を説明している。ぬれた服などはビニール袋に入れて保管しておく。

また、30^{km}以上離れた地域でも

「健康に影響しない量ではあるものの、放射性物質が含まれる可能性がある」として、できるだけ雨などにぬれないよう求めている。

◇ ◇

原子力情報資料室（東京都新宿区）によると、放射能漏れが起きた地域に雨が降った場合、大気中の放射性物質が雨水に付着し、遠くに飛散せずに地上に落下する。

そのため、遠隔地に被害が及びにくくなる一方、付近の地域の放射能汚染度が強まる傾向にあるという。

23.3.15 県、屋内待避の注意点掲げる

県は屋内待避の注意点として①外出を極力控える②ドアや窓を全て閉め、エアコンや換気扇を止める③やむを得ず外出する場合はマスクを着用、帰宅後は顔や手を洗い衣服を着替える④広報車やテレビ、ラジオなどで情報収集する一の4項目を掲げている。

県は市町村を通して、福島第一原発から20～30^{km}の住民に屋内待避を求めている。

23.3.15 県民の被ばく有無チェック

巡回スクリーニング開始

県は15日、避難所に避難している県民の被ばくの有無を巡回してチェックする「スクリーニング」を開始した。県職員や保健師らでつくる約30チームが福島工高（福島）や会津大（会津若松）など13カ所を回った。

会津大の調査は午前9時から実施。開始直後から避難した人が訪れた。国が福島第一原発から半径20～30^{km}の住民に屋内退避を指示した後は混雑を極めた。特にいわき市などからの避難者が次々に詰め掛け、午後に受け付けをした人の待ち時間は3時間以上。いわき市平の男性（35）は

「せめてお年寄りや子どもを優先して実施してほしい」と話した。

県はチーム数を増やし、約220カ所の避難所での調査を進める。避難者以外も受けられる施設は6カ所に増えた。郡山総合体



福島工高でスクリーニングを受ける被災者＝15日午後0時30分ごろ

育館（郡山）では、相双地方やいわき市などからの避難者ら4、5百人が列を作った。

スクリーニング施設は次の通り。

県男女共生センター（二本松） 郡山総合体育館（郡山） 船引町田村総合体育館（田村） 県南保健福祉事務所（白河） 県相双保健福祉事務所（南相馬） いわき市保健所（いわき）

23.3.15 付着したら「除洗」

放射性物質 専門家に対処聞く

福島第一原発の事故では、放射性物質が風に乗って広範囲に拡散したとみられる。各地で測定された放射線レベルは、現時点で即、健康に影響が出る値ではないが、放射線医学総合研究所（千葉市）などの話から、放射線の特徴や浴びた場合の対処法をまとめた。

◆がんの危険も

放射線は自然界にも存在し、われわれは何もしなくても年間2.4ミリシーベルト程度を浴びている。しかし、高レベルの放射線を一度に浴びると体細胞のDNAが破壊されて白血病やがんになる危険性がある。

15日に福島第一原発3号機付近で測定された毎時400ミリシーベルトは、いちどきに全身に浴びた場合、血中リンパ球が減少するレベル（250～500ミリシーベルト）。しかし実際には、ある場所のレベルが一定値で継続し続けるわけではないため、健康に与える影響を予測するのは難しい。このレベルでも、一瞬浴びただけなら問題ないとも言える。

◆外気遮断を

放射線から身を守るには、放射線源に近づかず、大気が汚染されている場合は、外気から遮断された室内にすることが重要だ。窓やドアは全て閉め、外気を取り込む換気扇やエアコンも止める。外に出なくてはならない場合には、ぬらしたタオルを鼻や口に当てた方がいい。放射性物質を吸い込む「内部被ばく」を防ぐためだ。

帽子をかぶりマスクをするなど、できるだけ肌を露出しない工夫も必要だ。

汚染された水や食物を摂取すると体内に蓄積され、内部被ばくの一因となる。安全が確認されるまでは、避難区域内の作物は食べない方がいい。

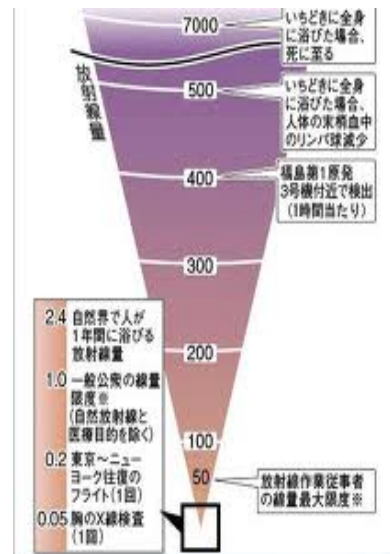
◆花粉症と同様に

放射性物質は、風で運ばれる目に見えないちりだ。付着してしまったら「除染」を行う必要がある。花粉症対策と同様に考えればいい。

まず着ていた服や靴はポリ袋に入れ口を縛る。その後、シャワーで体や髪を洗えば、放射性物質をかなり落とすことができる。ぬれた布やウェットティッシュで体を拭くのもいい。

放射性物質のヨウ素で内部被ばくした場合は、医師が処方する安定ヨウ素剤の服用が効果的。しかし、うがい薬やのどスプレーなどヨウ素が入った薬は、ヨウ素以外の成分が多いため、飲んではいけない。

放射線量と人体への影響
(単位：ミリシーベルト)



23.3.15 7269人にヨウ素剤配布 三春町

三春町は15日、39歳以下の町民ら7269人に「安定ヨウ素剤」を配布した。町は「安定ヨウ素剤」を独自に入手。専門家の助言をもとに、町民に服用することを勧めた。

配布は町保健センターなど町内8カ所で行った。町保健師らが飲む量、飲み方、効果や副作用などについて住民一人一人に丁寧に説明し、薬を手渡した。

23.3.15 ヨウ素剤備蓄増へ 県、態勢整える

県は15日までに、放射能の健康被害を防ぐ内服薬「安定ヨウ素剤」の備蓄量を増やす取り組みを始めた。

各保健福祉事務所などに十分な備蓄量はあるが、新たに購入するなどし、あらゆる事態に対応できる態勢を整える。

県によると、ヨウ素剤は原子力災害対策特別措置法に基づき、国の指示が出てから配布することになっている

23.3.15 基準を上回る放射線量検出 県警察官14人を除染

福島第一原発1号機の爆発事故で、県警の警察官14人から基準を上回る放射線量が検出され、全員が除染を受けていたことが15日、警察庁の話で分かった。健康状態は不明という。

いずれも12日午後の事故の際、1号機周辺で、住民らの避難誘導をしていたという。

23.3.15 福井、福岡救助関係者被ばく

福井県は15日、東日本大震災の被災地に派遣していた職員が被曝したことを明らかにした。派遣した県防災航空隊の隊員11人が、微量の被ばくを受けたことを明らかにした。

また福岡市消防局は同日、東日本大震災で被災した本県に応援派遣していた消防ヘリコプターと隊員6人が同県上空で被ばくしていたと発表した。

東京電力福島第一原発3号機が14日午前、水素爆発した際に被ばくした可能性が高いとみられる。いずれも被ばく量は微量で、健康に影響はないという。

23.3.15 30[㌾]屋内退避 13万6000人が対象

県によると、東京電力福島第一原子力発電所から半径20～30[㌾]圏内で屋内退避の対象となったのは8市町村の住民で約13万6千人。圏内に避難している住民を含めると14万人程度になるとみられる。

半径20～30[㌾]圏内には、一部が避難指示の対象になっている南相馬、浪江、広野、葛尾、川内、田村の6市町村に加え、飯舘、いわきの両市村が含まれる。

県の推計では、南相馬市は旧原町市、旧鹿島町の約6万人、いわき市は四倉地区などの約3万人、田村市は旧船引町などの約3万1千人が対象となる。

3田村、広野、川内三町村の避難所では合わせて28ヵ所で約5千人を受け入れている。

3一方、避難指示の対象は福島第一原発から半径20[㌾]圏内、同第二原発から半径10[㌾]圏内の南相馬、浪江、双葉、大熊、富岡、楡葉、広野、葛尾、川内、田村の各市町村の全域または一部。県は、両圏内の住民は合わせて7～8万人程度とみている。

23.3.15 増子参院議員が知事の要望聞く

民主党県迎災害対策本部長を務める増子輝彦参院議員（本県選出）は15日、福島市で佐藤雄平知事と会談し、県が求める支援策について要望を聞いた。

増子氏は会談終了後、

「原発の安全確保やガソリン、食料確保など県民の不安と不満を取り除くための対策を首相官邸に求める」

と述べた。



増子輝彦参院議員



佐藤雄平知事

23.3.15 国への緊急要請上部団体に要求 県町村会など

県町村会（浅和定次会長）と県町村議会議長会（鈴木巖会長）は15日、全国町村会と全国町村議会議長会に、国に放射能防止策などの緊急要請するよう求めた。

被ばく者に対する迅速・適切な医療体制の確立、自治体車両の燃油確保、生活必需品の確保と搬入などを盛り込んだ。

23.3.15 国のヨウ素剤搬送、県に要望

共産対策本部

共産党県東北関東大震災対策本部は15日、福島第一原発2号機で炉心溶解の危険性が出たとして県に対策を要望した。

県は放射能の健康被害を防ぐ内服薬「ヨウ素剤」の国による搬送を求めるべきだとしている。

23.3.15 静岡で震度6強

関東、東海で強い揺れ

浜岡原発異常なし

15日午後10時31分ごろ、静岡県東部で震度6強の地震があった。気象庁によると、震源地は静岡県東部で、震源の深さは約14^{km}。地震の規模はマグニチュード（M）6.4と推定される。津波の心配はない。

震度5弱を神奈川県西部、山梨県中・西部、山梨県東部・富士五湖で観測。関東や東海で震度3～4の強い揺れとなった。その後も余震が相次いだ。

静岡県では2009年8月にも震度6弱の地震があり、この時は地震防災対策強化地域判定会が「東海地震には結び付かない」と結論づけた。

中部電力によると、浜岡原発に異常はない。

静岡県御殿場市によると、市内の男性（34）が頭にけがをし、病院へ搬送された。軽傷のよう。

静岡県警などによると、富士宮市内で「家屋が倒壊した」との通報があったほか、火災や停電が発生している。

JR東海によると、東海道新幹線は品川ー浜松間で運転を見合わせた。

東名高速道路の太井松田ー清水インターチェンジ（IC）と中央高速道路の上野原ー勝沼ICなどが通行止めとなった。

23.3.16

原発危機 依然続く

福島第一 3号機白煙、4号機また火災

きょうにも地上から注水



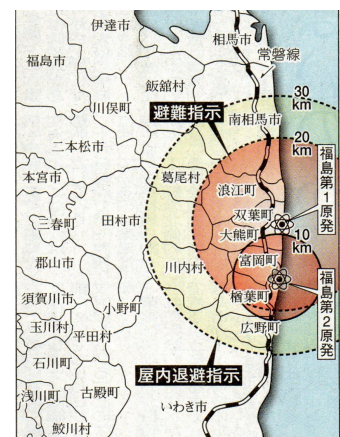
無残な姿 3, 4号機

東京電力社員が15日午前7時30分ごろに撮影した福島第一原発3号機（左）と4号機（中央奥）。3号機は上部の骨組みが折れ曲がり、瓦礫（がれき）が周囲に散乱。二度の火災が発生した4号機は原子炉建屋を覆うパネルが垂れ下がり白煙を上げている（東京電力提供）

東京電力の福島第一原子力発電所3号機付近から16日午前8時すぎ、白煙が噴出した。

4号機では午前5時45分ごろ、作業員が原子炉建屋の3階北付近から火災が発生しているのを見つけ通報した。東電や経済産業省原子力安全・保安院は3号機の白煙について、使用済み核燃料プールからの水の蒸発量が増えて白煙が上がったと分析。政府の原子力災害対策本部は

「格納容器に重大な損傷が生じた可能性は低い」としている。



23.3.16 放射線量 また危険数値

水素爆発のあった東電福島第一原発3号機横付近で16日午前6時20分、前日に続いて危険性の極めて高い一時間当たり400ミリシーベルトの放射線量が検出された。同社が発表した。4号機付近では100ミリシーベルト、2号機と3号機の間で55ミリシーベルトが検出された。同日朝、双葉地方広域市町村圏組合消防本部の消防隊17人が4号機の消火活動のためいったん、構内に入った。

しかし現場付近の放射線量が高いため引き返した。

23.3.16 重大損傷「可能性低い」

政府や東電は燃料プールへの注水作業を検討している。陸上自衛隊のヘリコプターによる水の投下を検討したが、上空の放射線量が高く、接近が困難なため16日中の実施は取りやめた。

警察当局は放射性物質の拡散を防ぐため、上空から水を投下できない4号機に地上から高压放水車で注水する作業を早ければ17日から始める。

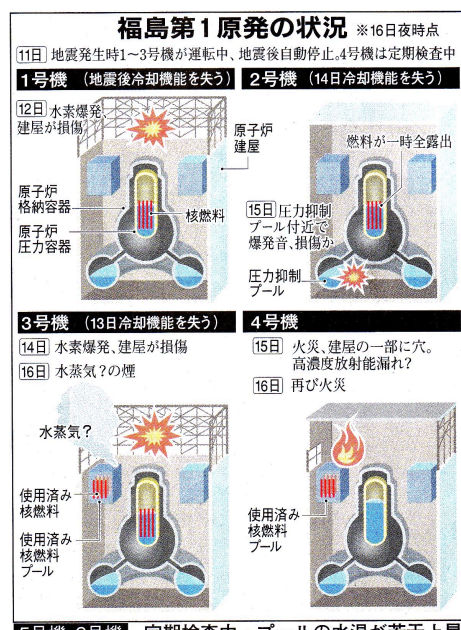
保安院によると、16日午前10時40分ごろ、福島第一原発の正門付近で、1時間当たり10³シーベルト（1³シーベルトは千マイクロシーベルト）と高水準の放射線量を計測した。

一般人の年間被ばく線量限度は千マイクロシーベルト。4号機で早朝発生した火災は約30分後には見えなくなった。けが人の情報は無い。15日午前にも同じ場所で火災があった。

東電は、4号機の使用済み燃料プールが、再び鎖的な核分裂を起こす再臨界となる可能性が否定できないとして、ホウ酸散布の検討を始めた。ホウ酸は核分裂で生じる中性子を吸収し臨界を抑える性質がある。

枝野幸男官房長官は16日午前の記者会見で、2号機に続いて3号機の格納容器も一部破損した可能性を指摘した。しかし、午後の記者会見でこうした見解を修正。

「その時点での情報に基づいて（破損の）可能性が高いという報告を受けた」と説明した。



23.3.16 オフサイトセンター機能せず

原発の緊急事態の対応拠点となる国の「原子力災害対策センター（オフサイトセンター）」（大熊町）が震災で被害を受け、機能のほとんどが失われたことが16日、分かった。

経済産業省原子力安全・保安院は

「想定外の出来事だが、機能を発揮できないことは問題だ」としている。

保安院は11日の地震発生直後、オフサイトセンターに現地災害対策本部をセンターに設置した。しかし、停電が起き電源車による発電を試みたが、電気系統が復旧していない。

衛星回線を使った原発関係の被害の情報収集は可能だが、それ以外の県災害対策本部と結ぶテレビ会議や市町村への情報提供など全ての機能を発揮できていない。

16日、対策本部を県庁本庁舎に移し、本部に参加している内堀雅雄副知事も福島市に戻った。センターは、国、県、市町村など関係機関が総合的に原発災害に取り巻くことができる緊急事態応急対策拠点施設として国が管理運営している。



23.3.16 危機管理「後手」

政府失態

国民の不安が増幅する一方の東京電力福島第一原発事故。日本政府が初めて直面する深刻な原発事故とはいえ、菅政権が刻々と変化する現場の状況を正確に把握できずに甘い見通しを発信、結果的に

「政府は大事なことを隠しているのではないか」
との不信感を招いている。

首相官邸サイドは東電の報告遅れを問題視するが、重大事故を想定した対応体制の未整備など「政権の失態」との批判は免れない。

官邸は当初、東電の情報を信頼し依拠していた。菅直人首相は11日、震災発生後初の記者会見で

「一部の原子力発電所が自動停止したが、外部への放射核物質等の影響は確認されていない」

と発表。枝野幸男官房長官はその後、会見で

「大規模な爆発が起こる可能性は相当低い」
と明言した。



米シンクタンク、科学国際安全保障研究所が公表した、16日に撮影された東京電力福島第一原発の衛星写真。左から4号機、3号機、2号機、1号機。3号機からは白煙が上がっている（デジタルグローブ・ISIS提供）

しかし原発の状況は想定を大きく超える事態に発展。不必要に不安を呼び起こさないとの配慮もあったとみられるが、14日午後には首相と枝野氏が東電幹部を官邸に呼び

「どうしてちゃんと報告を上げないんだ」
「きちんとしたシミュレーションを出せ」
と怒声を浴びせた。

東電の直接の所管は経済産業省原子力安全・保安院。今回の非常事態には官邸が直接乗り込んだが、情報伝達と指揮系統ができていなかったとの指摘は根強い。

原子炉事故への具体的な対処方法をめぐっても後手に回ったとの批判が強い。

日本の原発政策に警鐘を鳴らしてきた社民党の福島瑞穂党首は16日の記者会見で

「政府は東電などの『安全だ』『大丈夫だ』という楽観論をうのみにしてい



福島瑞穂党首

たのではないかと。危機意識が薄かった」と述べた。

関係者によると、14日夜に、原発周辺の放射線量上昇を懸念した東電が作業員の撤収を検討しているとの情報が官邸に入り、首相が激怒。翌15日早朝の東電幹部への叱責（しっせき）につながったという。

首相は16日午後、笹森清内閣特別顧問と官邸であった際、「私は原子力問題に詳しいので、余計に危機感を持って取り組んでいる」と述べた。

政府は東電との情報共有と指揮系統確立を目指し、15日に統合連絡本部を設置。枝野氏は

「連携は相対的に良くなっている」と評価したが、遅きに失した感は否めない。



笹森清内閣特別顧問

23.3.16 大惨事を矮小化

東電隠蔽

建屋の「爆発」は、「大きな音があり白煙が発生した」と言い換える。異常事態が止まらない福島第一原発で、東京電力は未曾有の大惨事に直面しても、事態を矮小（わいしょう）化しようとするかのような説明を続ける。

15日午前8時半。会見は4号機での爆発音確認から2時間以上たってから。担当者は「大きな音が発生して建屋の屋根が損傷し、火が出た。詳しいことは現地から報告が上がっていないので分からない」と繰り返した。

3時間近く経過した午前11時20分になっても、認めたのは「火災」と「破損」だけ。一方で、飛び込んできた別の社員から紙を渡された担当者が早々と「鎮火宣言」をする場面も。16日に公開した写真には、「屋根の損傷」どころか、がれきの山と化した4号機の無残な姿が写っていた。

1号機の建屋が吹き飛んだ12日。東電が「厚さ1～2mのコンクリート製で、放射性物質の閉じ込めに万全を期している」としていた建屋はあっけなく崩壊していた。だが、当初「大きな揺れが発生し、大きな音があり白煙が発生した」と発表。

「原子炉（を覆う）格納容器に異常はない」と強調した。

国との事前協議が必要とはいえ、東電の発表は遅い上に、専門用語を多用。住民が高い関心を寄せる放射線量については

「身体に影響はない」と繰り返し、現場の作業員についても「被ばくは管理しているので間違いない」とする。避難している住民は

「説明が分かりにくい」「東電や国が何をしているのか見えない」と口をそろえ、

「住民の不安をあおるばかりだ」と憤る。東電はこれまでも、原発のトラブル隠しや、修理、検査記録の改ざんなどさまざまな不祥事を起こし、そのたびに隠蔽（いんぺい）体質を露呈。謝罪と「再発防止」を誓ってきた。東電関係者は

「東電には情報を出さなかったり矮小化したりする傾向がある。会社の不利益になることは言わない方がいいという内向きの体質だ」

と指摘。

「データも事象も把握しているのだから、全ての情報を出し、国民に知らせるべきだ。今、守るべきは『安全』であって『会社』ではない」と危機感をあらわにした。

東電ホームページにある原発のコーナーには
「起こり得ないような大きな地震を想定し設計しています」
「最大級の津波を評価（考慮）し、安全性を確認しています」
の言葉がむなしく残されたままだ。

23.3.16

解説

なすすべないのか

原発でいったい何が・・・ 70人、暗闇の作業

真つ暗闇の建屋内をほとんど手探りで進む作業員一。東日本大震災をきっかけに東京電力福島第一原発の危機的な状況が続いている。なぜここまで追い込まれてしまったのか。東電はなすすべがないのか。原子炉4基がそれぞれ深刻なトラブルを抱える中、作業員たちは大量被ばくの危険ともたたかいながら懸命の作業にあたっている。

3号機から白煙が上がった16日、陸上自衛隊のヘリコプターが上空から水を投下しようとしたが、放射線量が高すぎて断念。2, 3号機では格納容器が損傷している可能性があり、放射性物質の拡散を一刻も早く止める必要があるが、効果的な対処ができないまま時間が経過している。

11日の地震発生後に第一原発を襲った大津波。海側には防砂堤があるだけで、かさ上げした地盤も史上最大級の津波には及ばなかった。

原子炉建屋は津波に耐えたが、屋外にあった燃料タンクや配管は壊滅的な打撃を受けた。

停電後、6、7秒で切り替わるはずだった非常用ディーゼル発電機が機能しなかった一因もここにある。さらに受電、配電設備も損傷し、第一原発は一切の電力を失うことになった。

ある東電関係者は

「今後、周辺地域の停電が解消されたとしても、第一原発ですぐに電気を使えるようになるかは不透明」

としている。

16日時点で第一原発に残っているのは東電社員や協力企業社員ら約70人。1号機の北の水位を維持するための注水を監視している。しかし第一原発敷地内は放射線量が高くなっている。

16日には毎時10³シーベルトの放射線量を計測。屋外で10時間作業しただけで、放射線作業従事者が緊急時にのみ許容されている年間被ばく量に達してしまう。対策本部内にいてもじわじわと放射線を浴びることになる。

東電は再び電力が供給されて大量の高圧注水ができるようになるまで、なんとか1～3号機の水位を維持したい考えだが、既に作業員から多くの被ばく暑が出ている。海水をくみ上げるポンプ車に付き切りで管理することは困難だ。また压力容器内の水位などのデータも定期的に監視しなければならないが、建屋の中にある中央制御室は放射線量がより高い。

作業をさらに困難にしているのは建屋内の照明がなく真つ暗なこと。もともと建屋には一切の窓がなく、作業員は懐中電灯の光を頼りに、建屋内の狭い通路を往復しなければならない。このため原発中枢部の中央制御室に運転員が常駐できないという異常な状態。

東電関係者は

「作業員にも家族がいる。できる限りのことはしているが、国民の皆さんにも分かってほしい」

と話している。

23.3.16 水道水からヨウ素とセシウム 福島で検出

県災害対策本部は16日、福島市の水道水から放射性物質の放射性ヨウ素と放射性セシウムを検出したと発表した。検出された量は国の飲用水の摂取基準を下回っており、飲んでも健康に影響がないとしている。同日の2回目の検査では、検出されなかったが、3回目の検査で、再び微量のヨウ素を検出した。

同本部によると、同日午前8時に福島市方木田の原子力センター福島支所の水道を採取し、分析した結果、水1キログラムから177ベクレルのヨウ素と、58ベクレルのセシウムを検出した。

ベクレルは放射能の量を表す単位。国の原子力安全委員会は、飲料水の摂取制限の基準を水1キログラム当たりヨウ素300ベクレル、セシウム200ベクレルとしている。

3回目の検査で検出されたヨウ素は21ベクレル。

◇ ◇

県災害対策本部は17日以降、県内各市町村の飲料水の調査を開始することを明らかにした。各市町村の飲料水を採取し、国の研究機関で調べる方針。

23.3.16 被災者、苦渋の大移動

県内避難所、満杯に 各地転々、県外脱出も

地震と津波を受けた東京電力福島第一原子力発電所の放射能漏れが続く16日、浜通りの被災者の大移動が加速した。中通りや会津に設けられた避難所は一部を除いてほぼ満杯の状態に。避難所を転々とする被災者が多く、受け入れる各地の避難所の担当者は対応に追われた。

被災者自ら避難所運営に協力するケースも。避難生活が長期化する中、介護が必要な患者や一人暮らしの高齢者に対する一層のケアが必要になってきている。

富岡町と川内村は住民の安全のため、同村に設けた合同災害対策本部が「強制避難」を決断。

16日朝から約5千人の町村民が郡山市のビッグパレットふくしまなどに移った。ビッグパレットは地震による被害を受けたが、職員らが急きょ、受け入れ態勢を整えた。バスなどで到着した住民は早速、スクリーニングを受けた。富岡町の会社員男性（48）は

「持病がある父の薬も手に入らなくなり、見捨てられた感じがしていた。ほっとした」

と疲れ切った表情で話した。

約2500人が避難している福島市のあづま総合体育館は満杯状態が続く。避難者が施設に無断で知人らを入所させるケースが相次いだ。施設管理者は16日から入所者全員の腕にペンで印をつけ、印のない人は館内に入れない対応を取った。

浪江町津島地区周辺の避難住民を受け入れる二本松市には約3千5百人が移動した。約7百人が入った旧針道小の避難所は避難住民のボランティアが入所者の名簿づくりを担う。

ボランティアの一人、とび職若山雅盛さん（59）は「町職員があまりに忙しそうなので手伝おうと思った。こんな時だからこそ、助けを待つだけではだ



入所者管理のため全員の腕に印を付ける作業が行われた
福島市のあづま総合体育館＝16日午前9時20分ごろ



二本松市の旧針道小の避難者名簿を管理する若山さん
(右)＝16日午後0時40分ごろ



め」
と話した。

会津若松市はあいづ総合体育館で受け入れていた。
河東総合体育館にも開設。主に浜通りから約320人
が入った。二本松市から来た浪江町の会社員川久保年
子さん（39）は

「原発からできるだけ離れようと来た。ここにも、いつまでいられるか」

白河市の白河中央中体育館に避難しているいわき市の会社員杉田洋一さん（55）は妻の実
家がある川崎市に向かっていたが、途中で道路渋滞と燃料不足のため変更したという。



あいづ総合体育館で炊き出しの準備をする会津若松市婦人
団体連絡協の会員＝16日午後3時30分ごろ

23.3.16 衛生面でペット避難所に入れず

避難所には建物に入れることができないペットを抱え、乗用車内などで寒い夜を過ごす被災者が出ている。避難所の一つ、福島市のあづま総合体育館の職員は

「衛生面などの問題からやむを得ない」

と話す。市内の福島高に避難する南相馬市の藤岡由伊さん（15）のペットはネコ。夜は母親
が車内で一緒に寝ている。

「家族も同然なのに…」

と話した。

23.3.16 県外避難希望3万人超 県、他県との調整決める

県内の避難所がほぼ満杯状態となり、大規模な避難の受け入れが困難になったため県は16
日、屋内退避区域の住民が県外にスムーズに避難できるよう他県と調整することを決めた。

待避区域のうち、南相馬市と飯館村で計3万数千人が県外への避難を希望しているとみ
られる。

県は原発から30km圏内の避難者を県内で受け入れていた。増加が予想を超え、数百人以上
収容できる施設がなくなったという。県は自治体からの要望に基づき、国に県外避難への支
援を求めた。

県は17日から、受け入れ可能としている茨城県や栃木県などと具体的な避難先の調整を始
める方針。国はバスなどの移動手段確保や支援物資支給、スクリーニングチームの派遣など
で県外への避難が円滑に進むようにする。区域内には医療機関6施設、特別養護老人ホーム
などが17施設あり、県は自治体から要望があった場合、県外避難を支援する。

関西広域連合は16日、京都府と滋賀県が本県の避難者を受け入れると発表した。

避難先の確保の他、移動手段や生活物資、子弟の教育環境、医療などの確保に努める。生
活再建の希望があれば、市町村と府県が協力して対応する。

23.3.16

「戻りたい・・・戻れない」

家族行方不明、自宅は避難圏内 つらい胸の内

福島に避難 南相馬の浜田さん

「戻れるものなら今すぐにでも戻りたい」。

福島市のあづま総合体育館に避難する南相馬市のＪＡそうま原町支店長浜田賢次さん（59）は、自宅が放射能漏れで避難指示圏内にあり、行方不明の家族を捜しに行けない。

地震発生後、大津波に自宅が流された。父保男さん（83）、妻充子さん（55）、三女直子さん（26）の行方が分からなくなった。避難所を訪ね歩いて捜したが、見つからなかった。

目撃情報などから津波に流された自宅に３人がいたことが判明した。

「恐らく命はないだろう」

と覚悟している。それでもこの目で確かめたい。思いは募るばかりだが、放射能の危険が阻む。いつでも行けるように長靴を買って避難所に持ってきた。

「まさかこんな日が来るとは。人間はいつかは死ぬものだと言いつけ聞かせるしかない」。

つらい胸の内を明かした。

23.3.16 健康に影響なし 県内放射能 福島は20.80マイクロシーベルト

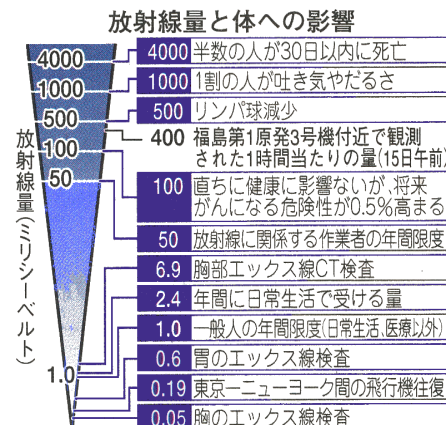
県が県内７方部で行っている放射能の常時測定調査の数値は【表】の通り。

福島市で午前１時、１時間当たり20.80マイクロシーベルトが検出された。平常値は0.04マイクロシーベルト。午後７時には14.70マイクロシーベルトまで下がった。県は理由は分からないとしている。

県は、福島第一原発から約60^{キロ}離れた福島市にも原発の影響が及んでいるとみているが、

「健康に影響を与える数値ではない」としている。会津若松市と南会津町はほかの５市と比べて低い数値となった。

シーベルトは放射線の人体への影響度合いを測る単位で、1000マイクロシーベルトは1ミリシーベルトに当たる。



【県内7地点の環境放射能測定値】

(16日午後7時現在。単位＝マイクロシーベルト／時間)

月日	測定時刻	福島市	郡山市	白河市	会津若松市	南会津町	南相馬市	いわき市
平常値		0.04	0.04～0.06	0.04～0.05	0.04～0.05	0.02～0.04	0.05	0.05～0.06
16日(水)	1:00	20.80	2.86	3.80	1.17	0.25	3.76	1.03
	4:00	18.50	2.66	4.10	0.66	0.12	3.76	5.45
	7:00	19.20	2.82	4.00	0.68	0.11	3.88	1.69
	10:00	19.20	3.00	4.00	0.60	0.11	4.03	1.20
	13:00	18.10	2.82	4.00	0.59	0.10	3.68	2.50
	16:00	18.80	3.11	3.80	0.58	0.10	3.67	1.96
	19:00	14.70	2.96	3.40	0.44	0.11	3.61	1.64

※測定場所＝県北保健福祉事務所、県中合同庁舎、県南合同庁舎、会津合同庁舎、南会津合同庁舎、南相馬合同庁舎、いわき合同庁舎

※2015年度は胃のX線1回分の約10分の1の照射量。東京・ニューヨーク間の飛行機往復の照射量は200マイクロシーベルト。

23.3.16 スクリーニング常設施設を増設

県、8カ所に

県は16日、被ばくの有無を調べる「スクリーニング」を行う常設の施設を6カ所から8カ所に増やした。各施設に希望者が多数訪れており、対応した。

16日は引き続き巡回スクリ

ーニングも実施した。県職員や保健師らでつくる約40チームが福島高（福島）や田村高（田村）など18カ所の避難所を回り、避難者の被ばくの状況を調べた。

17日から常設でスクリーニングを行う8カ所は次の通り。

県男女共生センター（二本松）郡山総合体育館（郡山）田村市総合体育館（田村）県県南保健福祉事務所（白河）会津総合運動公園あいづドーム（会津若松）県立南会津病院（南会津）県相双保健福祉事務所（南相馬）いわき市保健所（いわき）

◇ ◇

被ばくの有無を調べる県のスクリーニングで、基準値の毎分100、000カウント以上の数値が検出された住民が少なくとも数人いたことが16日の県災害対策本部会議で明らかになった。県は基準値を超えた場合、全身除染を行っている。

23.3.16 アクセス集中 一時接続困難に 県のHP

16日午前、県のホームページへのアクセスが集中し、一時的に接続しにくい状態となった。県によると、環境放射能測定値を閲覧しようとアクセスが殺到したとみられる。環境放射能測定値は携帯端末から「福島モバイル県庁」につなげば閲覧できる。

23.3.17

空と海から放水 福島第一原発

自衛隊、3号機に 使用済み燃料冷却

東日本大震災による東京電力福島第一原発の事故で、政府の災害対策本部は17日午前、冷却機能が停止した3号機の使用済み燃料プールに、自衛隊のヘリコプターで水を投下した。同日夜には、自衛隊の消防車両5台が地上からも放水した。燃料プールを冷却し、高濃度の放射性物質が外部に放出されるのを防ぐ前例のない試み。深刻な事態に見舞われた第一原発の危機を回避するため、空と陸から懸命の作業が続けられた。



17日午前、東京電力福島第一原発3号機に水を投下する陸上自衛隊のヘリコプター（福島中央テレビより）

自衛隊はヘリによる水の投下と地上からの放水を18日も実施す
れ

自衛隊の車両に先立ち、警視庁も高圧放水車による放水に着手し
たが、現場の高い放射線量などのため中断された。

ヘリによる投下は現場上空の放射線量が作業に問題ないことを
確認した後、午前9時48分に開始。7500リットルの容器に海水を入れた
大型ヘリ 2機で計4回にわたって行われた。

北沢俊美防衛相は

「間違いなく3号機にかかった。地上からの放水が決断できな
い状況下で、きょうが限度だ」

と述べ、早朝に菅首相と相談し決断したと明かした。一方、地上
からは消防車両5台で計30トンを放水。作業は午後7時35分に始ま
始まり約30分後に終わった。

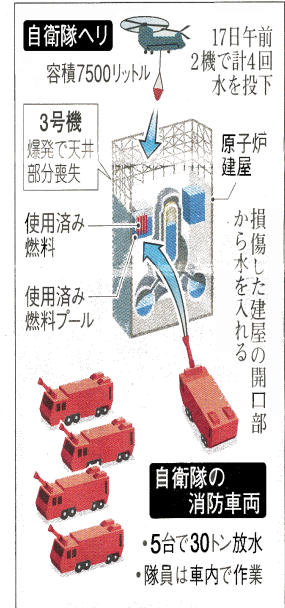
当初は約10台の車両を連結し、海水をくみ上げながら直接放水
する計画だったが、ホース接続などの際に隊員が被ばくする恐れ
があるため、車両のタンク水だけを放水することに変更した。

あらゆる手だてを

佐藤節夫県生活環境部長は

「事態を食い止めるため、引き続きあらゆる手だてで全力を尽くしてほしい」
と述べた。

福島第1原発3号機の 冷却作業イメージ

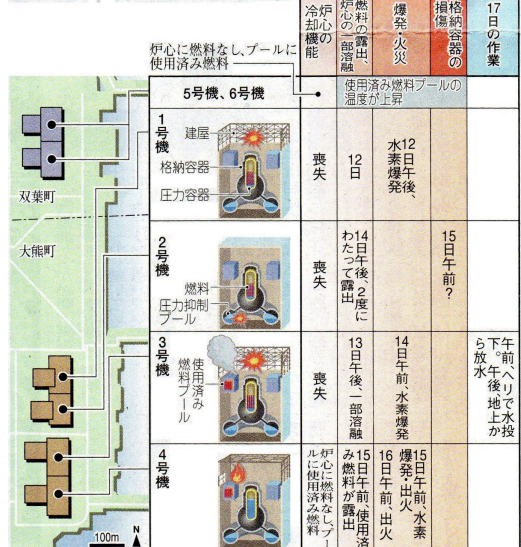


23.3.17 外部電源復旧へ作業

東京電力福島第一原発で、東北電力からの
送電線を発電所につないで電気を使えるよう
にするための作業が17日、進んだ。原子炉な
どの冷却機能回復に必要な電力確保に向けた
措置。18日以降、供給電力を1，2号機の電
気系統につなぐことを検討している。東電は
「冷却設備を確保することは重要な課題」
としており、経済産業省原子力安全・保安院
は、外部電源回復は状況の安定化につながら
るとみている。

また敷地内の放射線量の低い場所に電源車
を常駐させた「仮設電源」を設置、冷却用
に使う海水を循環させるポンプの電源とする。

福島第1 原発事故の経過



※ 使用済み燃料プール

原子炉で使い終わったウラン燃料を、冷却するためのプール。使用済み燃料は核分裂反応
を終えても熱を放出し続けるため、核燃料再処理施設へ運び出すまでの間、循環させた水で
十分に冷やし続ける。使用済み燃料は猛毒のプルトニウムのほか、極めて強い放射線を出す
核分裂生成物を含み、厳重な管理が必要。プールは原子炉建屋内にあり、水温は通常、40度
前後に保たれている。

23.3.17 「水量増え放射線数値低下」

東電は17日夜、原発敷地内の一部で午前中に毎時3700マイクロシーベルト超だった放射線量が、水を投下した後の午後1時半に毎時4000マイクロシーベルトを超えたと発表した。

同じ場所の、消防車両による放水前後の放射線量はともに同約3600マイクロシーベルトで、大きな影響は見られなかった。引き続き原発周辺の放射線量のデータを集め、冷却効果や今後の対策を検討する。

◇ ◇

東電が福島市で行った会見では、水投下前の午前中と放水後の午後8時時点の比較で、放射線量が毎時3700マイクロシーベルト超から約3600マイクロシーベルトに低下したとし、

「プールの推量が増えたため数値が下がったと分析できる」とした。

23.3.17 政府提供の食料不足

県内避難者向け 県、協力呼び掛け

県は避難者向けの食料確保のため政府に対し、1日当たり36万食の提供を求めているが、現時点で10～18万食程度にとどまっていることが17日、分かった。県は企業や団体に協力を呼び掛け、安定配給に努める。

呼県内の避難者は約10万人に上っており、今後も増える可能性もあるため、12万人の3食分として36万食の提供を求めている。

県によると、政府からおにぎり、カップ麺、パンが提供されているものの必要量は確保できていないという。県は新潟県から1日6万食程度、会津地方や南会津地方の企業・団体などから7～8万食程度の提供を受けている。

23.3.17 国、追い込まれ「賭け」

深刻化する東京電力福島第一原発の事故で、政府の対策本部は十七日、陸上自衛隊ヘリコプターによる水投下に踏み切った。消防車両による陸上からの放水に加え、空と陸から封じ込めを図る構え。作戦には警視庁の高圧放水車も参加した。大掛かりな対策の陰で、想定外の事態に対応できない政府の判断のまずさも浮上。追い込まれた「賭け」の行方を、国民は固唾（かたず）をのんで見守っている。

▼楽観的な見方

「17日が限度。早く水を投下し冷やしないと、大変な事態が起こる」。

16日、官邸の首相執務室。菅直人首相と北沢俊美防衛相は、陸自ヘリによる水投下で一致した。北沢氏は17日、実施を見送った前日の放射線量と

「状況は変わっていなかった」

とし、

「首相と私の重い決断を受け統合幕僚長が判断した」と説明。隊員の被ばく覚悟で踏み切ったことを明らかにした。

異例の手段の前に打つ手はなかったのか。政府関係者によると、震災翌日の12日、自衛隊と在日米軍は

「できることは何でも協力する」

と官邸に申し出ていた。ところが、官邸側は

「まずは警察と消防で対応する」

と、動かなかった。防衛省関係者は



菅直人首相



北沢俊美防衛相

「米軍の協力を仰ぐことへの野党の批判を恐れたのか」といふかる。

一方で首相は12日早朝、慎重論を押し切り福島原発の視察を強行、野党時代からこだわる「現場主義」を貫いてみせた。

「水もつぎ足し、格納容器で囲まれているわけだから、メルトダウンのような危機的状況にはならないのでは」。

この日の与野党党首会談で示した見方は楽観的だった。

▼背景に経験不足

こうした判断に、深刻化させる引き金とならた原子炉内での水素爆発が「日本の技術者に全く想定外の事態」（小出裕章京都大原子炉実験所助教）だったことが影響した可能性がある。

日本では、原子炉内部は外部と完全に隔離する考えが優勢だった。しかし、1990年以降、内部圧力で格納容器が壊れる可能性が検討され、蒸気を放出し圧力を下げる「ベント」の装置が付けられるようになった。

ただ、実際に作業が行われたのは今回の事故が初めて。小出助教は大量の水蒸気を一気に外に出そうとしたことで、配管途中にあるフィルターに蒸気が水となって詰まり、行き場を失った水素が格納容器と建屋の間にたまる結果となったとみる。「経験不足」が遠因になったというわけだ。首相は1号機で水素爆発が発生した翌日の13日、社民党の福島瑞穂党首に

「東電も原子力委員会も楽観論だった。『水素爆発は起きない。大丈夫だ』と聞いていた」

と悔やんだ。

「最後のとりでは自衛隊」。

政府と東電の統合対策本部は15日になって、自衛隊が原発施設の冷却に当たるよう要請、在日米軍にも協力を求めた。政府は

「対応が後手に回るサイクルを立ち切るための一手」（伴英幸原子力資料情報室共同代表）として、「賭け」に出ざるを得なくなった。

▼「ノウハウない」

「化学部隊と一緒に行ってもらいたい」。

第一原発へ高圧放水車の派遣を求められた警察当局。不可欠の条件として警察庁は、専門知識を持つ陸自の中央特殊武器防護隊（対NBC部隊）の同行を、官邸や防衛省に強く迫った。

前例のない試みに臨む現場には、強い不安感が漂っていた。

高濃度の放射線が検出される敷地内での作業。どこまで原子炉建屋に近づけるのか。どの時点で撤退するのか。同庁幹部は

「警察は判断するノウハウがない。陸自の協力がなければ無理」

と話す。別の幹部は、自衛隊から提供され、機動隊員が着た防護服にも

「高いレベルの放射線にはほとんど意味がないという話も聞く。どのくらい被ばくするのか」ともらした。

「あの組織は、よく分からないんだよ」。

警察内部には東電への不信感も渦巻いていた。現場での協力は欠かせない。しかし、上層部からは

「ちゃんとやれるのか」

との声が上がる。ある幹部は

「結局、誰もやらないからウチがやるしかないということ」

とこぼした。

一方の陸自。

「最後のとりでにはなるが、（任務に）合理性はあるのか」。

防衛省幹部らは、「最終手段」とされる任務の重要性和、被ばくの危険性との間で揺れ続けた。ある幹部は

「危険を顧みず、命懸けで任務にあたるのは当然」といい、東京・市谷の職場で放水作業を映すテレビ映像を淡々とした様子で見つめた。

「よくやってくれた」。

首相は17日午後、ヘリからの水投下終了後に官邸を訪れた北沢氏や折木良一統合幕僚長をねぎらった。防衛省の背広組幹部は

「危ないからといってやらないわけにはいかない。でも隊員を特攻隊にはいけない」と、苦悩の表情を浮かべた。

23.3.17

大震災から 1 週間

県内死者・不明4000人超

東日本大震災は17日で発生から 1 週を迎えた。

同日午後10時半現在の県内の死者は546人、行方不明者は3491人に増え、死者、行方不明者は計4037人と 4 千人を超えた。

家屋の被害は全壊、半壊、一部破損合わせて13,662棟。

ライフラインは電気が 3 万 8 千 999 戸で停電、都市ガスは 1 万 5 千 10 戸で供給が止まっている。水道は中通りを中心に 22 万 8 千 932 戸で断水が続いている。

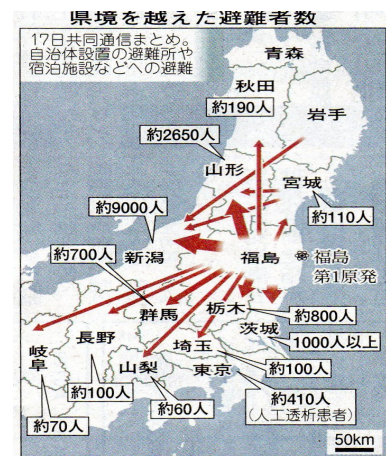
JRは全線で運転を見合わせ、高速道路は一般車両が通行止めとなっている。主要・一般国道は19カ所で通行止めが続いている。

高速バスは郡山－会津若松間で臨時運行が始まった。

◇ ◇

東北地方では38万人が避難所で生活する。損壊した建物は 7 万 5 千戸以上に及び、47都道府県が被災者のため公営住宅計約 1 万 4 千 9 百戸の提供を申し出た。県境を越えて避難した人の数は共同通信のまとめで約 1 万 5 千人に上った。

死者・行方不明者は約 1 万 5 千人となった。



23.3.17 効果は一時的？

福島第一原発の冷却放水

東京電力福島第一原発で17日始まった使用済み核燃料プールへ水を入れる作業。水の蒸発が進み燃料が破損、放射性物質が放出される事態を防ぐ「切り札」と国や東京電力は期待するが、原子力の専門家からは効果を心配する声や、温度を一時的に下げる“対症療法”にとどまるとの見方が出ている。

核分裂した放射性物質は熱を出しながらほかの物質になり、原子炉から取り出した使用済み燃料からも熱は出続けている。

それを冷やすプールの水循環機能が地震で失われ、水がなくなっていく事態を招いた。

東電によると、3、4号機のプールの容量はそれぞれ約1400ト。ヘリコプターから17日に



東京電力福島第一原発の(右から)1号機、2号機、3号機、4号機＝17日午前9時15分、大熊町の30キロ以上沖合で共同通信社ヘリから

3号機に投下された水は、7.5トンの容器で4回、最大でも30トン。警視庁の高圧放水車や白衛の消防車両などは、一台当たり数トン。

小出裕章京都大原子炉実験所助教（原子核工学）は
「少なくとも数百トン以上は投入しないと、焼け石に水だ」と指摘する。

「燃料の露出部分を冷却する効果はあるだろう。温度をとりあえず下げることが大切」とみるのは宮崎慶次・大阪大名誉教授（原子力工学）。

使用済み燃料は水に漬からず露出している恐れが強いため、
「高温の燃料に大量の水が当たると、壊れる可能性がある。
まず霧状に水を掛け露出部分を冷やした後、大量の水を入れる方がリスクが少ない」と話す。

元原発設計技師の田中三彦さんは
「水がうまくかかっても使用済み燃料からの崩壊熱がなくなるわけではなく、一時的な処置。水を投入し続けなければならない」と言う。

宮崎名誉教授も
「電源を復旧するなどして、ポンプでプールに水を入れるのが本来の方法。それまでのつなぎにすぎない」と強調している。



小出裕章京都大
原子炉実験所助教



宮崎慶次
大阪大名誉教授



田中三彦氏

23.3.17 陸自と警察、決死の任務

最悪の惨事を防ぐため、福島第一原発3号機の冷却作業に着手した政府。被ばくリスクの高い任務に投入されたのは、陸上自衛隊と警視庁の「精鋭部隊」だ。

放射性物質の大量拡散を食い止めようと、極限の作業が続いた。

警視庁によると、地上からの放水チームは11人で構成。警備部の幹部を指揮官とし、25～41歳の10人の機動隊員が集められた。警備部関係者は

「16日に、高圧放水車を扱える機動隊員が緊急招集された」と明かす。

「あの時と同じ緊迫感がある」。

警備畑が長かった元警視庁幹部が思い出すのは、1995年の地下鉄サリン事件だ。多くの人々の命を奪った有毒物質。今回は、放射性物質の拡散が国民生活を脅かす。

「福島原発事故の相手は目に見えない。対処の難しさはオウム以上だ」。

この元幹部によると、作業に使う高圧放水車は69年に東大・安田講堂で繰り広げられた占拠学生と機動隊の攻防戦を契機に導入。放水自体が目的のため通常の警備車両より鉄板が薄いといい、

「状況次第では、車の周りに放射線を遮る盾が必要。調査や準備がないまま厳しい作業が続いているのでは」と思いやる。ある機動隊関係者は

「国民の危機に立ち向かうのがわれわれの仕事だ。任務を遂行し、無事に帰ってほしい」と話す。

一方、上空から水を投下するという未体験の任務を命じられた陸自。出動した第一ヘリコプター団（千葉県木更津市）は、約750人が所属する陸自最大のヘリ部隊だ。CH47大型輸送ヘリ2機に放射線防護服を着用した10人が乗り組み、40分間限定で原発周辺を飛行。約7.5トンの水が入るバケットと呼ばれる容器で、2回ずつ3号機を狙った。



地下鉄サリン事件。完全装備で営団地下鉄霞ヶ関駅構内に入る消防庁の化学機動隊。＝1995年3月20日

「一回は必ずやるとの強い意志を持って」。

16日は規定の放射線量を大幅に超えたため断念。17日には制服組トップが隊員を鼓舞するため、強い口調で呼び掛けたという。ホバリング（空中静止）による被ばくリスクを避けるため、17日の作業では風向きや風の強さも考慮。

「そこでいい。それ以上下がるな」。

ヘリパイロットの幹部自衛官が、テレビに向かってつぶやく場面もあった。

制御のきかない原発を止める手だてはほかに見つからず、対処は自衛隊や警察に委ねられた。陸自幹部は絞り出すように語った。

「万策尽きればホバリングしてでもやるしかない。『死ぬ決心』が必要な任務なのは間違いない」

23.3.17 3, 4号機の新たな写真公開 東電

東京電力は、損傷を受けた福島第一原発3, 4号機の新たな写真を17日に公開した。

社員が16日に自衛隊のヘリコプターに同乗して撮影した。

建屋が激しく傷み、3号機からは白煙が上がっている様子を鮮明にとらえている。



白煙を上げる福島第一原発3号機（上）と激しく損傷した福島第4号機（下）
16日午後撮影（東京電力提供）

23.3.17 県立大野とJA双葉の統合病院来月の開所不可能に

県立大野病院（大熊）とJA双葉厚生病院（双葉）の統合病院は4月1日の開所が不可能な状況となった。

県、JA福島厚生連によると、東京電力福島第一原子力発電所での水素爆発などを受け、両病院の医師や職員が全員が避難しており、開所に向けた準備が間に合わないという。

23.3.17 県、国と協議へ

県は17日までに、県外に避難する県民の移送費の公的負担について国と協議する方針を固めた。県外の避難所に県民が避難する場合、災害救助法に基づき移送費の2分の1を国、2分の1を県が負担する。

県は県外避難希望者が少なくとも3万数千人おり、今後さらに増えることが想定されることから費用負担が膨大になるとみて、県負担を抑える特別措置などを国に求める考えだ。

◇ ◇

県は17日、屋内退避区域の住民が県外にスムーズに避難できるように茨城、栃木両県などと調整を始めた。両県内の避難所、受け入れ可能な人数、避難手段などを検討している。

23.3.17 第一原発労働者健康診断を指示

東電に福島労働局

福島労働局は17日までに、東京電力福島第一原子力発電所に対し、岡発電所の労働者に臨時の健康診断を実施するとともに、事故に伴う緊急作業に従事した労働者に医師の診察・処置を受けさせるよう指示した。

対象は14日以降に同発電所で作業し、100ミリシーベルト以上の放射線を浴びた労働者。健康診断では自覚症状や白血球数などを定期的にチェックする。